

第3章 にいどのおか 新殿岡遺跡の調査

第1節 調査の概要

新殿岡遺跡は、大野川支流の茜川左岸の微丘陵上に位置している。遺跡の標高は約125～135mを呈し、遺跡は、地形的に小道を境に、西側の斜面部を1調査区（1区）、2調査区（2区）とし、東側の斜面部を3調査区（3区）と区分している。調査対象面積は約4,800㎡である。

新殿岡遺跡の調査は、平成12年～平成13年3月、平成13年4月25日から平成13年7月19日の約3箇月間実施した。発掘調査の結果、縄文、弥生、古墳時代の遺物と、古代～中世の遺構や土師器等が検出されている。

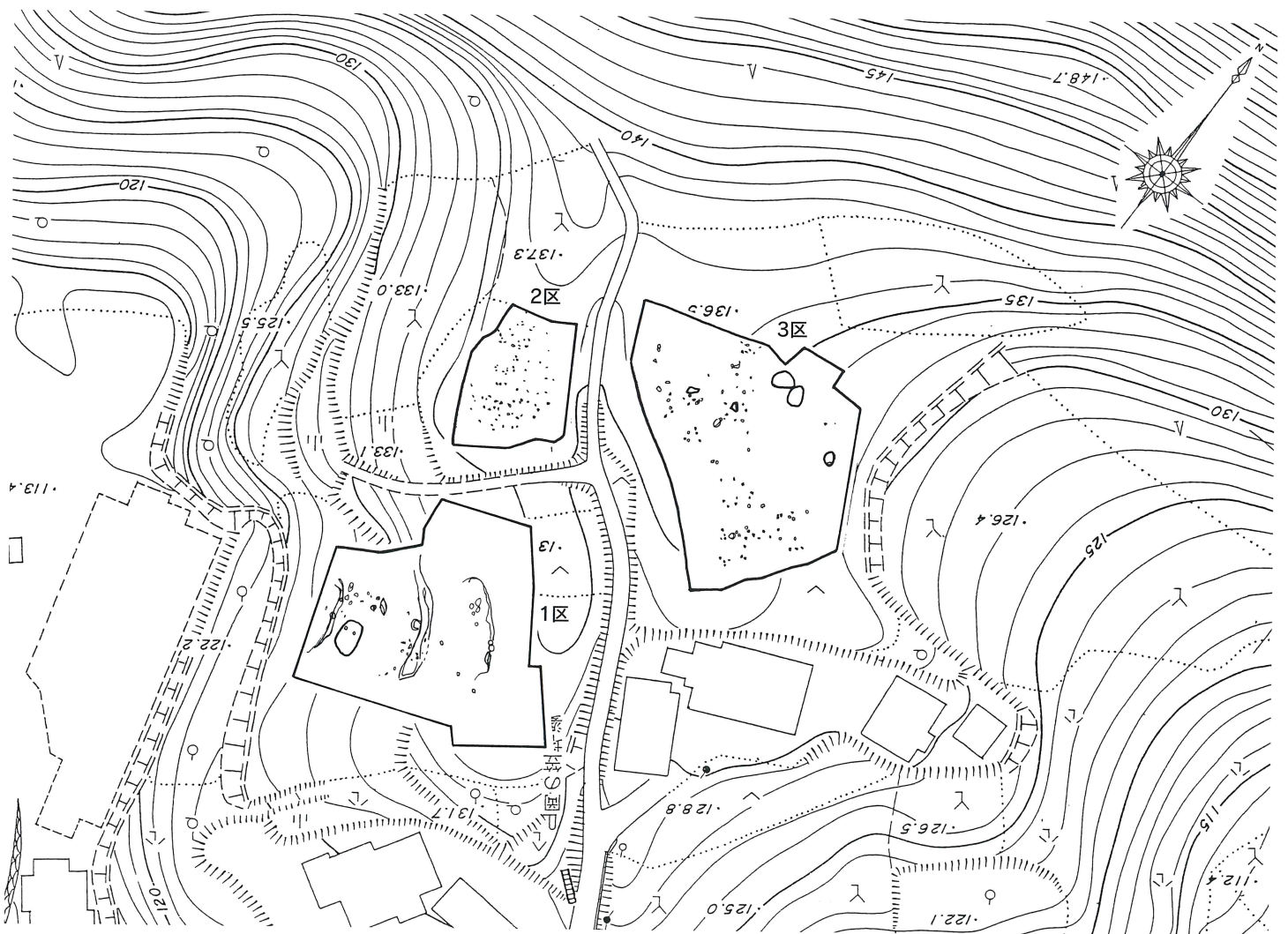
発掘調査は、試掘調査の結果に基づいて、表土を約30～40cm前後重機で剥ぎ、遺構を検出する作業から行った。

調査の結果、小道西側の1区は、傾斜角度が約13度の斜面部であり、この斜面には等高線に沿った三日月状の弧状遺構が、上・中・下の3段に遺存していた。弧状遺構にはそれぞれに少数の土師器が伴っていた。遺物は奈良末～平安時代の土師器である。遺構は用途不明であるが、焼土や炭化物が伴っており住居跡の可能性は高い。

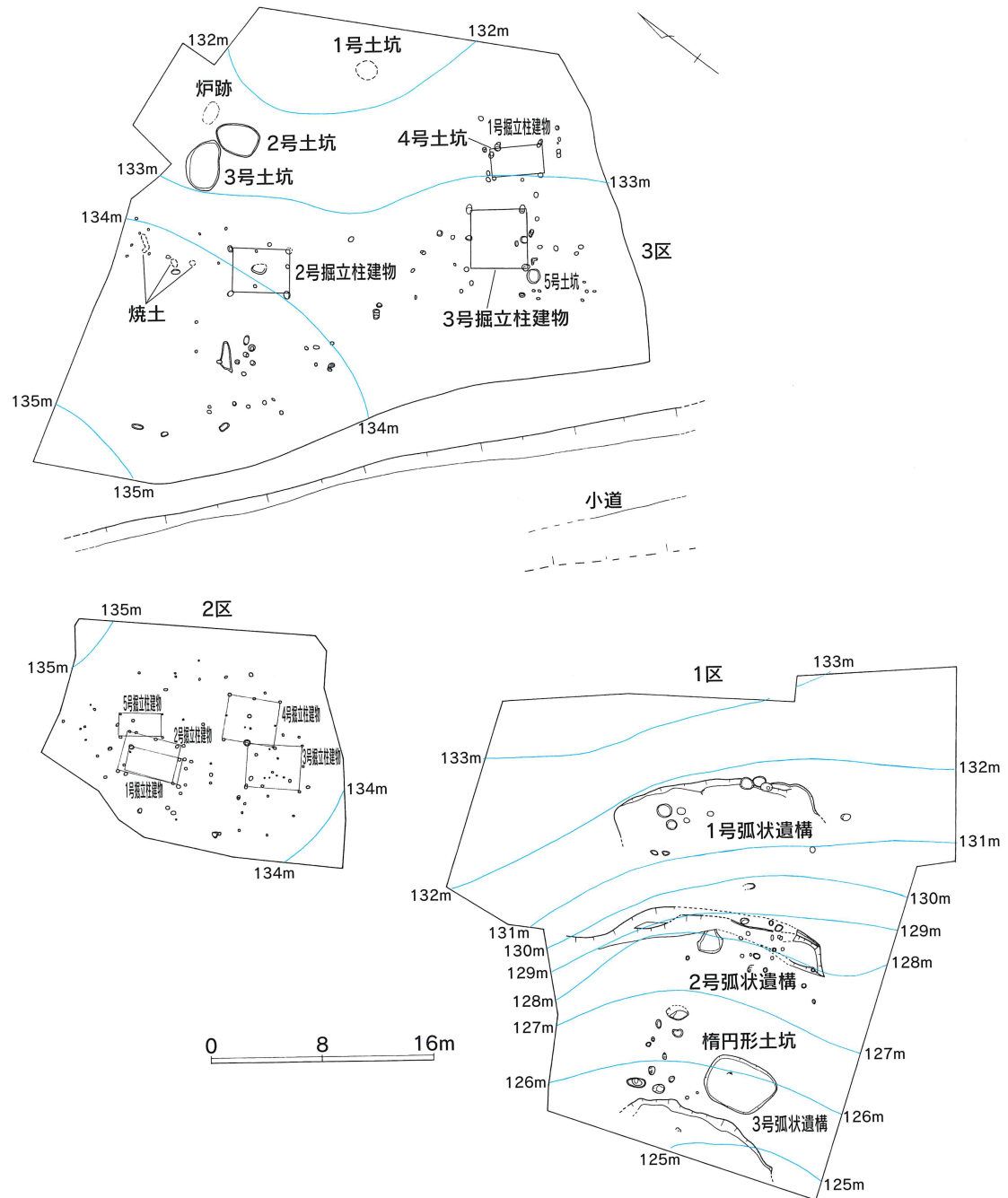
1区の北側にある2区は柱穴が多数検出されており、一間×一間の掘立柱建物遺構が4基確認されている。掘立柱建物遺構の時期は不明である。

1、2区の東側の3区からは弥生中期と推察される袋状貯蔵穴1基、古代の土坑や炉跡、中世の土坑が検出されている。

現地の発掘調査には、豊後大野市千歳町在住の人々を、1日に約15人程度の割合で、発掘調査作業員として雇用した。



第329図 新殿岡遺跡1・2・3区位置図 (1/1000)



第330图 新殿岡遺跡1・2・3区遺構配置図 (1/480)

第2節 遺構と遺物

新殿岡遺跡 1区

1区は比較的急な斜面部を形成している。調査面積は約960㎡である。調査区東側では標高133m、調査区西側では標高125mであり、8m程度の比高差がある地形である。傾斜角度は約13度程度である。地形そのものが等高線に沿って緩やかな弧状を呈して低くなっていく傾向があり、検出された遺構も等高線に沿うような、三日月状に弧を描く特異な遺構であった。このような弧状遺構は、標高131～132mに1号、標高128～129mに2号、標高125～126mに3号と、約3～4mおきに3基の遺構が上・中・下と三段に位置していた。

1号弧状遺構（第331図）

1区の東中央部、標高132mの等高線に沿って形成された三日月状の遺構である。遺構は弧に当たる部分を掘り下げて前面に平坦なテラス状の空間を形成するものである。その規模は、弦に当たる部分で、北・南の長さは14.8mを測る。遺構の掘り込みの深さは65cmである。テラス状の平坦部の幅は中央部の広い所で約3m程度である。遺構の中心部付近には焼土が遺存しており、遺構中央東壁付近には石皿・台石状の一抱えもする川原礫と土器片多数が出土していた。この遺構に伴う柱穴は断定できない。出土遺物から推察して古代の遺構と考えられるが、特異な構造であり用途・機能は推量の域をでない。

2号弧状遺構（第332図）

1区の中央部、標高128～129mの等高線に沿って形成された三日月状の遺構である。遺構は弧に当たる部分を掘り下げて前面に平坦なテラス状の空間を形成するものである。その規模は、弦に当たる部分で、北・南の長さは約16mを測る。遺構の掘り込みの深さは18～55cmである。テラス状の平坦部は北側では顕著ではなく、中央部から南へかけての幅は広い所で約2.3～3m程度である。遺構中央東壁から南側付近には土器片が出土していた。柱穴らしい遺構は多数あるが、この遺構に伴う柱穴かどうかは判断できない。出土遺物から推察して古代の遺構と考えられるが、特異な構造であり用途・機能は推量の域をでない。

出土遺物（第333・334・335図）

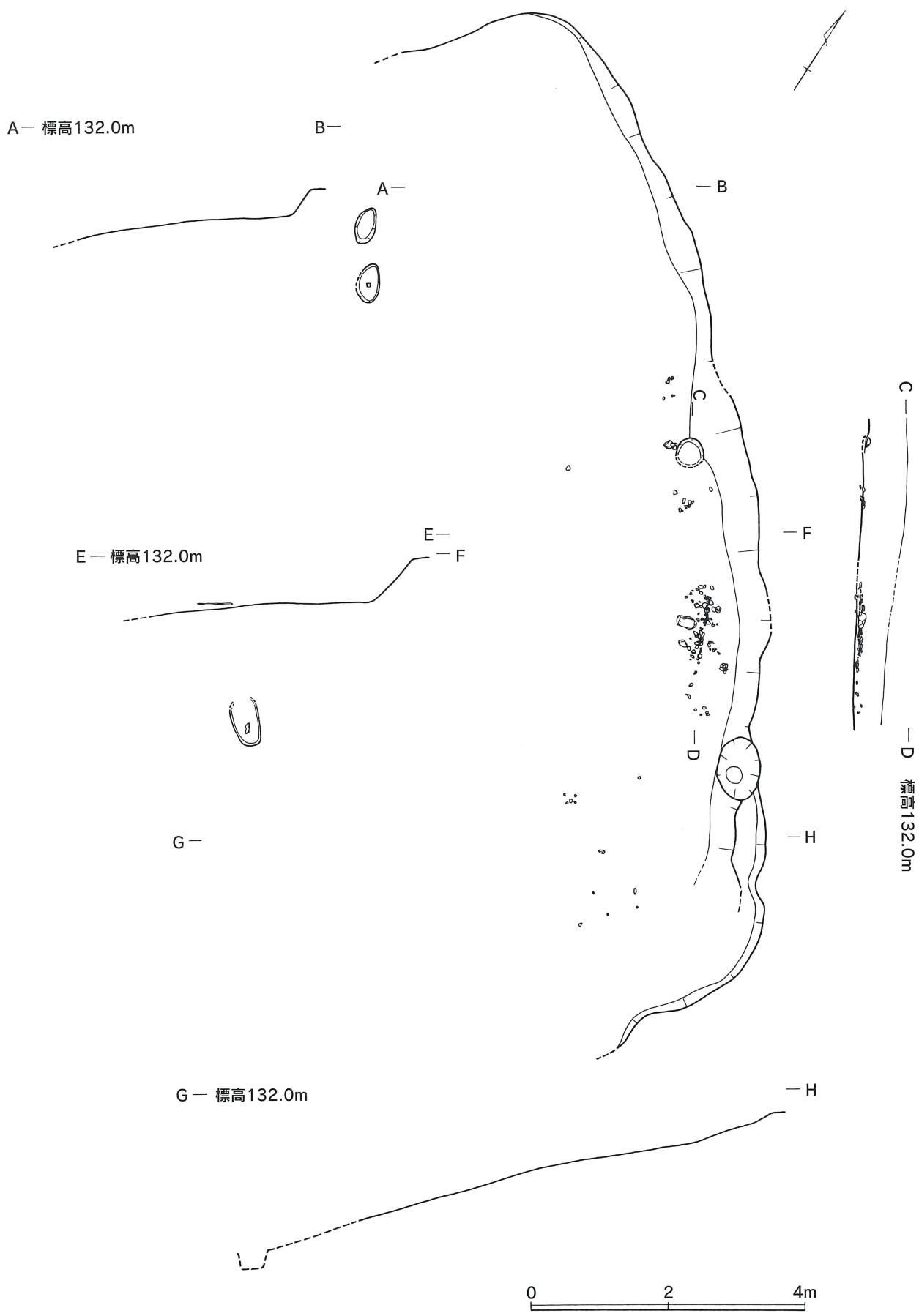
1～3は縄文土器である。1～2は深鉢形の突帯文土器である。外反する口縁部下に、刻目突帯文土器を施す。3は浅鉢形土器の口縁部である。表裏に緩い段状の変化をつけ端部を丸くおさめる。

4～7は弥生終末～古墳時代前期の土器である。4は甕の口縁部である。口縁部は外反気味に短く直立し、胴部は球形に誇張される。表面は刷毛目で表裏ナデ調整。口径13.6cm、頸部11.8cmを測る。5は底径2.6cmを測る丸底である。表面は指押えを残す。6・7は高坏の脚部である。6・7は斜めに広がる脚部下半で、外に屈曲して広がる。6は屈曲部で5.8cmを測る。表面は横のミガキ、内面は横ケズリ。7は屈曲部で6.5cm、裾部で12.8cmを測る。裾部の端部は沈線状に仕上げる。表裏面は刷毛目のちナデ調整。

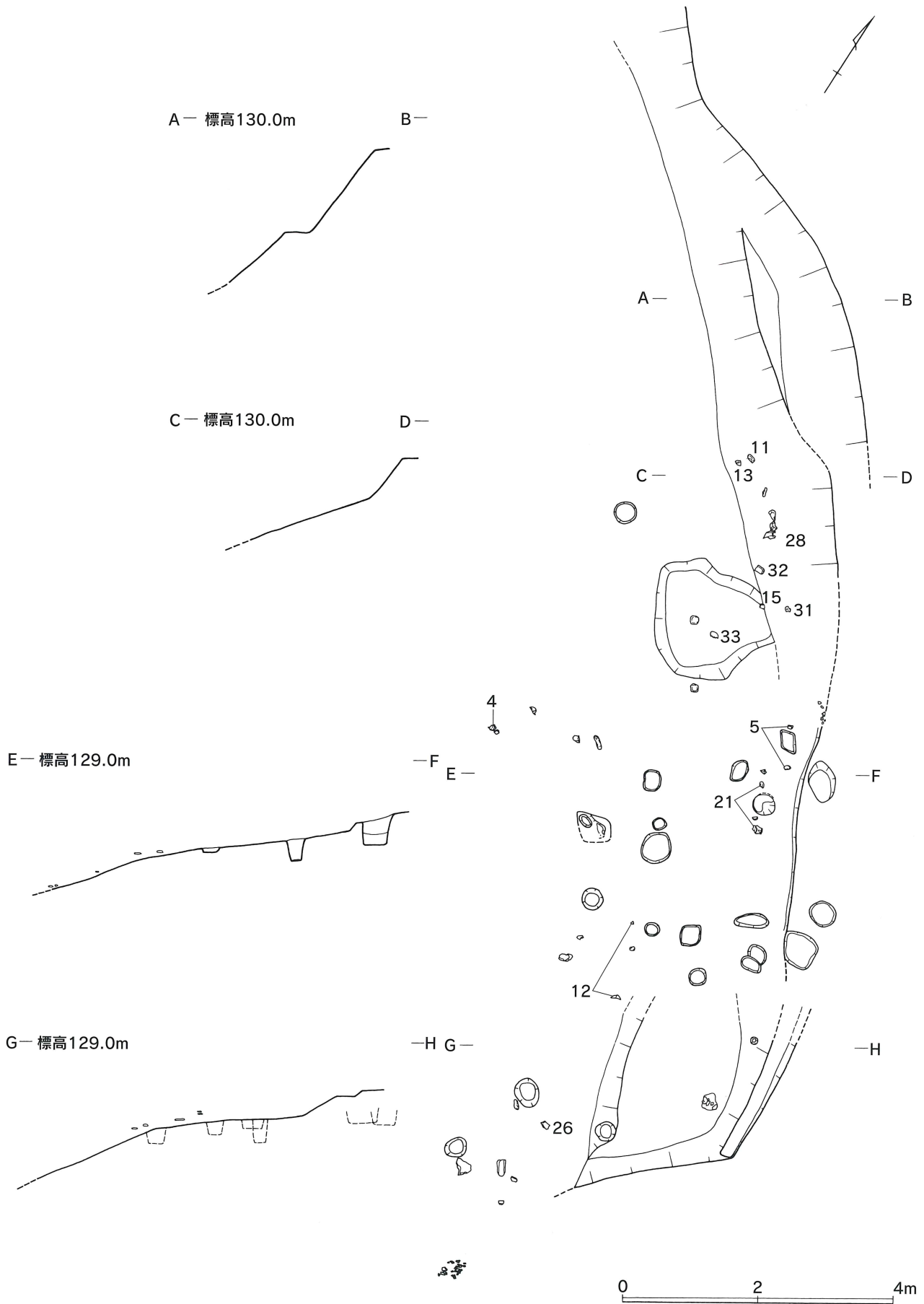
8は円筒状で徐々に窄まる器形である。口径7.8cmで表裏に指押さえ痕を残す。

9～30は8世紀末～9世紀初頭の土器である。9・11～14は土師器、10は須恵器の坏である。9、10は平底底部から斜め直線的に延び口縁部で小さく外反する。表裏ロクロ仕上げで底部は回転ヘラ切り離し。9は口径12.2cm、底径8.21、器高4cmを測る。10は口縁部の先端を欠損している。底径7.6cmを測る。11・12は平底部から斜め直線的に延びた口縁部。表裏ロクロ仕上げで底部は回転ヘラ切り離し。11は口径13.2cm、底径7.6cm、器高4.3cmを測る。12は底部を欠損し、口径13cmを測る。13・14は口縁部を欠損している。13は底径7.6cm。14は底径8cm。

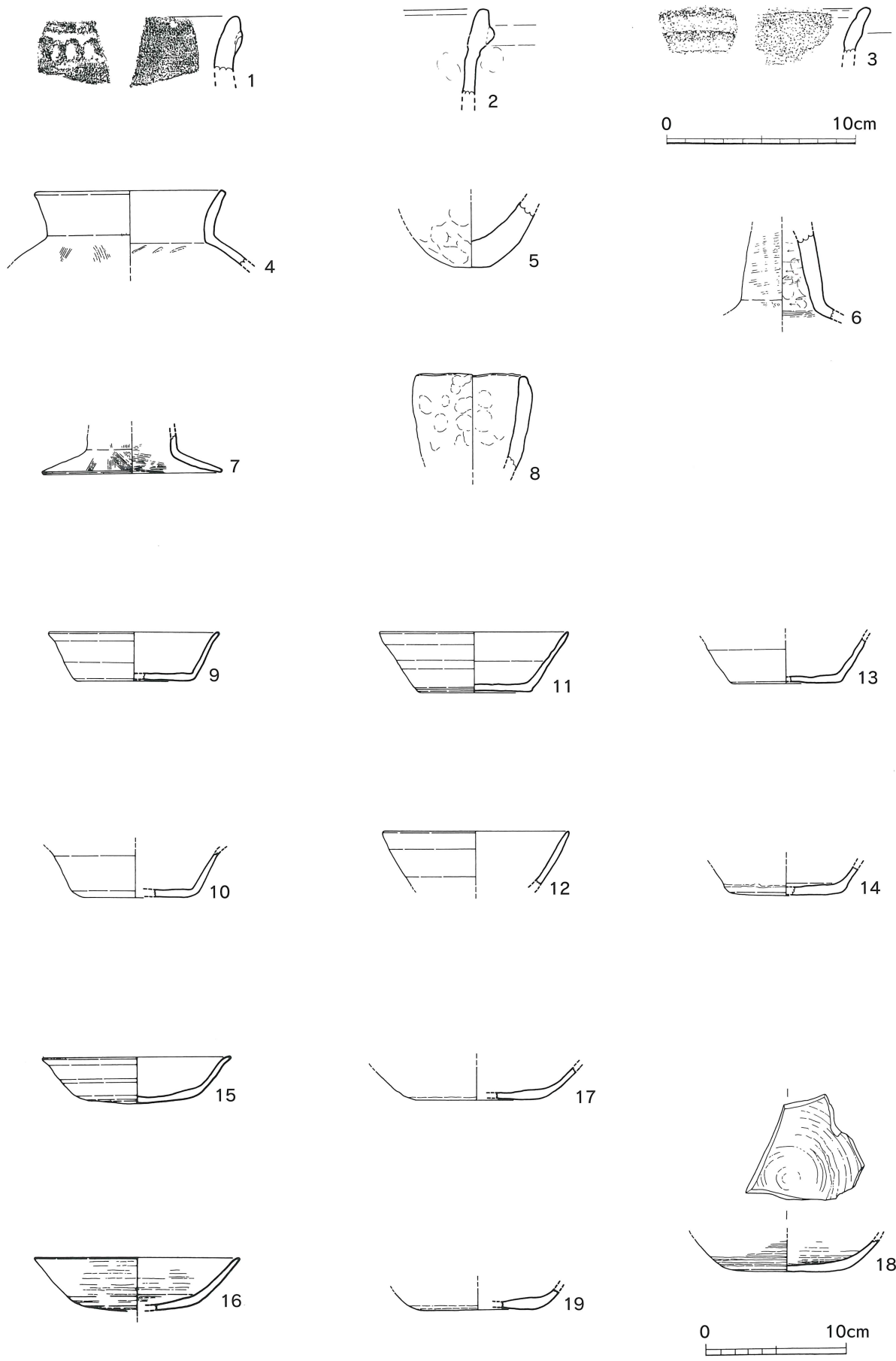
15、16は椀形を呈する土師器の坏である。底部から丸みを持って斜めに立ち上がる。口縁端部は僅かに外反する。表裏ロクロナデ調整し、底部は回転ヘラ切り離し。15は口径13.4cm、底径7.9cm、器高3.3cmを測る。16は表裏ヘラミガキで調整し、底部は回転ヘラ切り離し後粗いミガキ。口径14.4cm、底径7.8cm、器高3.8cmを測る。17～20は底部である。底部は回転ヘラ切り離し後粗いミガキが施される。18は表裏のヘラミガキが顕著で



第331図 新殿岡遺跡1区1号弧状遺構実測図 (1/80)



第332图 新殿岡遺跡1区2号弧状遺構実測図 (1/80)



第333图 新殿岡遺跡1区2号弧状遺構出土遺物実測図① (1/3·1/4)

ある。

21は須恵器である。口縁端部は心持ち外へ摘み出す形態で、やや丸みを持った体部から、回転ヘラ切り離し後粗いナデの底部へ続く。口径15.4cm、底径9.5cm、器高5.4cmを測る。

22は土師器の椀である。丸底から球形の体部を経て、尖り気味の口縁端部に至る。底部付近はヘラケズリを残す。器壁は厚く表裏ナデ調整。口径11.6cm、器高5.2cmを測る。23は丸底部の器壁は厚い。表裏ナデ調整。内部は指圧痕を残すナデ調整。

24は高台の付いた瓦器碗である。内面はヘラミガキで表面はナデ調整。高台径は6.9cm。

25は土師器の企救型の甕である。口縁断面は内湾気味の「く」の字を呈し、余り張らない胴部に至る。表面は縦の刷毛目、内面はナデ調整。口径21cm、頸部径18.2cm。26は短く外反する口縁部で胴部は張らない甕形土器である。口縁端部端外側に摘み出す。表裏はロクロナデ調整。口径20cm、頸部径15.3cm。

27は須恵器の筒形の胴部である。表裏ロクロナデ調整。底径11cm。28は須恵器の甕である。口縁部は大きく外反し、口唇下は三角形に厚く誇張される。頸部は締まり、胴部は球形に大きく張る。表面は格子目タタキ、内面は同心円文タタキや指押さえ痕が残る。口径25cm、頸部径18.4cmを測る。29は口縁端部を丸く外側へ収める。短い「く」の字口縁から誇張された胴部に至る。表面は横刷毛目、裏面はナデ調整。口径32.5cm、頸部径30.7cm、胴部径33.1cmを測る。

30は土錘の破片である。長さ2.1cm+ α 、幅1.15cm、孔径0.4cm、重さ2.5g+ α 。

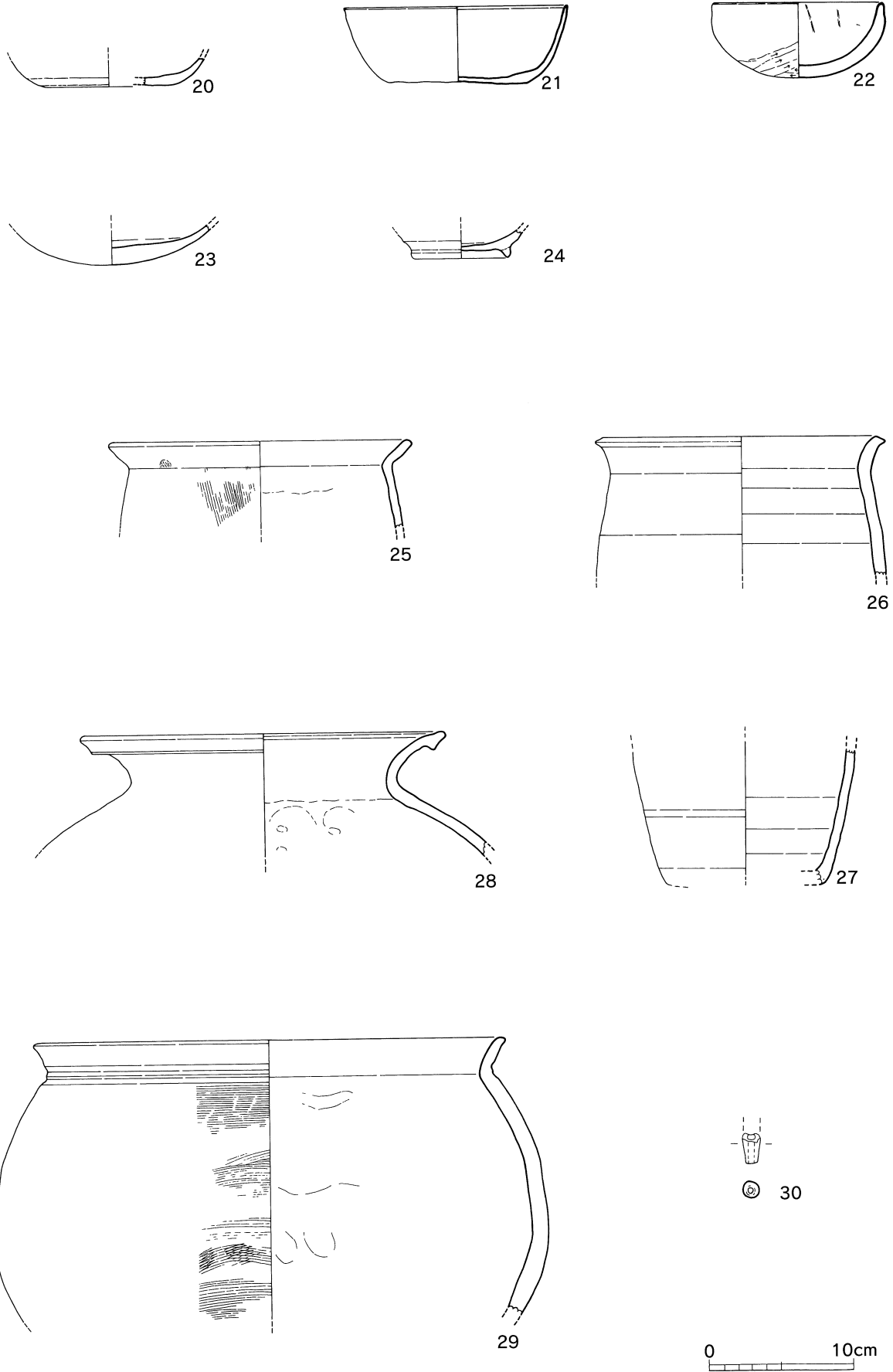
31は拳大の川原礫を使用した磨石・敲石である。表裏に磨り面、縦側面には敲き痕が残る。長さ10.3cm、幅7.7cm、厚さ6cm、重さ733g。32は安山岩製の石皿の破片である。長さ9.3cm+ α 、幅14.2cm+ α 、厚さ8.9cm、重さ1.9kg+ α 。33は分厚い横長剥片を使用した礫器である。表裏から粗い剥離が施されている。

3号弧状遺構 (第336図)

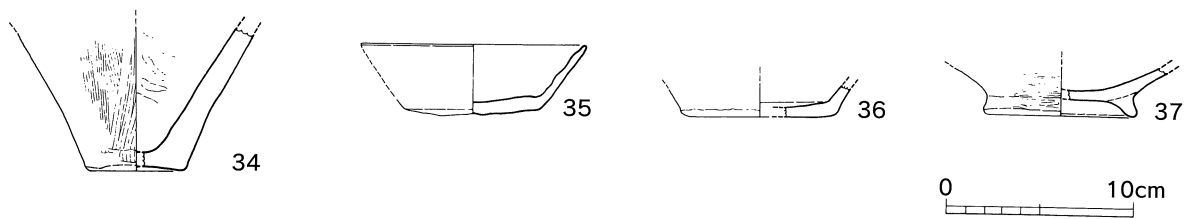
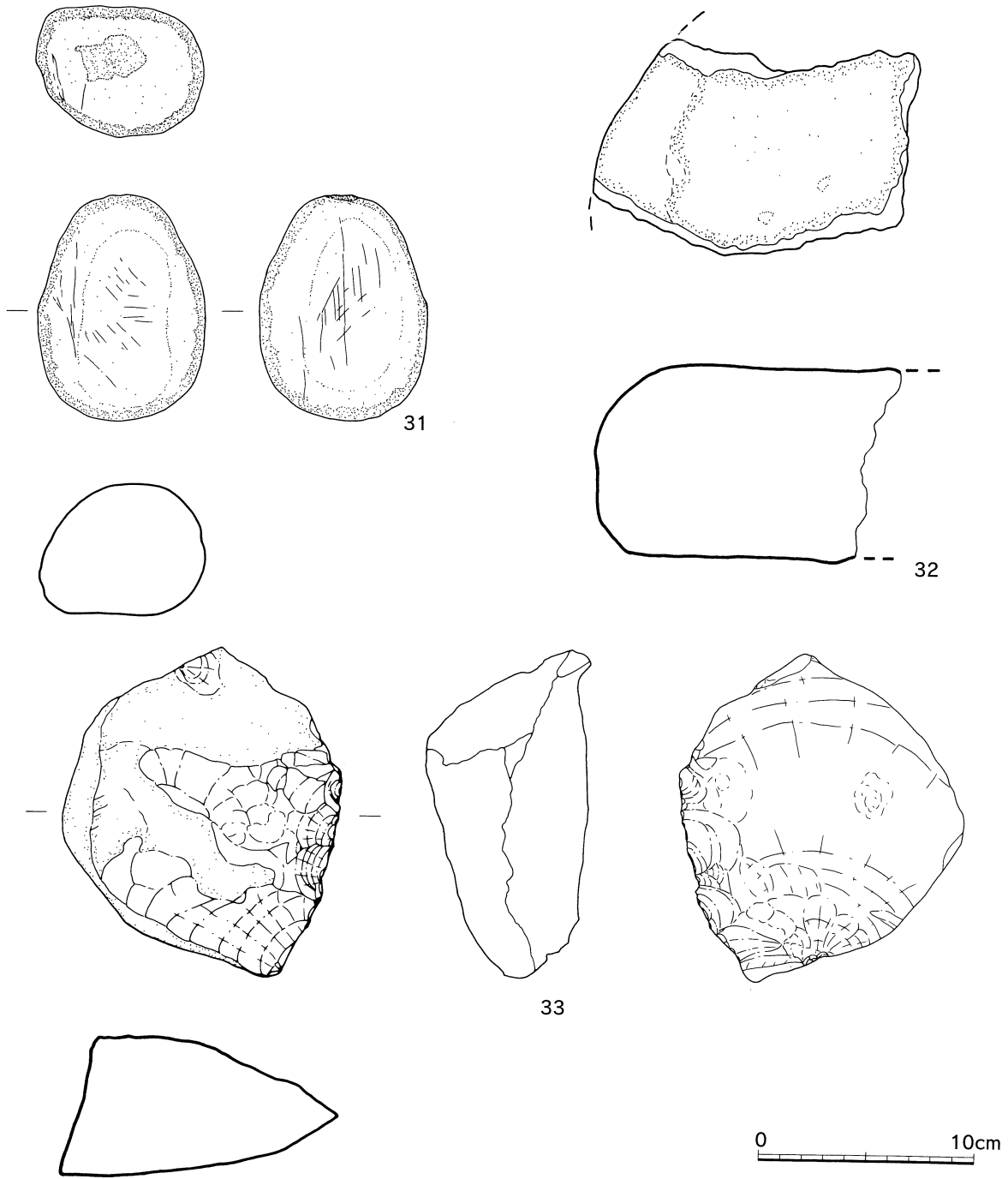
1区の西端部、標高125～126mの等高線に沿って形成された三日月状の遺構である。遺構は弧に当たる部分を掘り下げて前面に平坦なテラス状の空間を形成するものである。その規模は、弦に当たる部分で、北・南の長さは約11.7mを測る。遺構の掘り込みの深さは75cmである。テラス状の平坦部の幅は中央部の広い所で約1.5m+ α 程度である。遺構内には土器片が少数出土していた。柱穴らしい遺構は一つあるが、この遺構に伴う柱穴かどうかは判断できない。出土遺物から推察して古代の遺構と考えられるが、特異な構造であり用途・機能は推量の域をでない。

出土遺物 (第335図34～37)

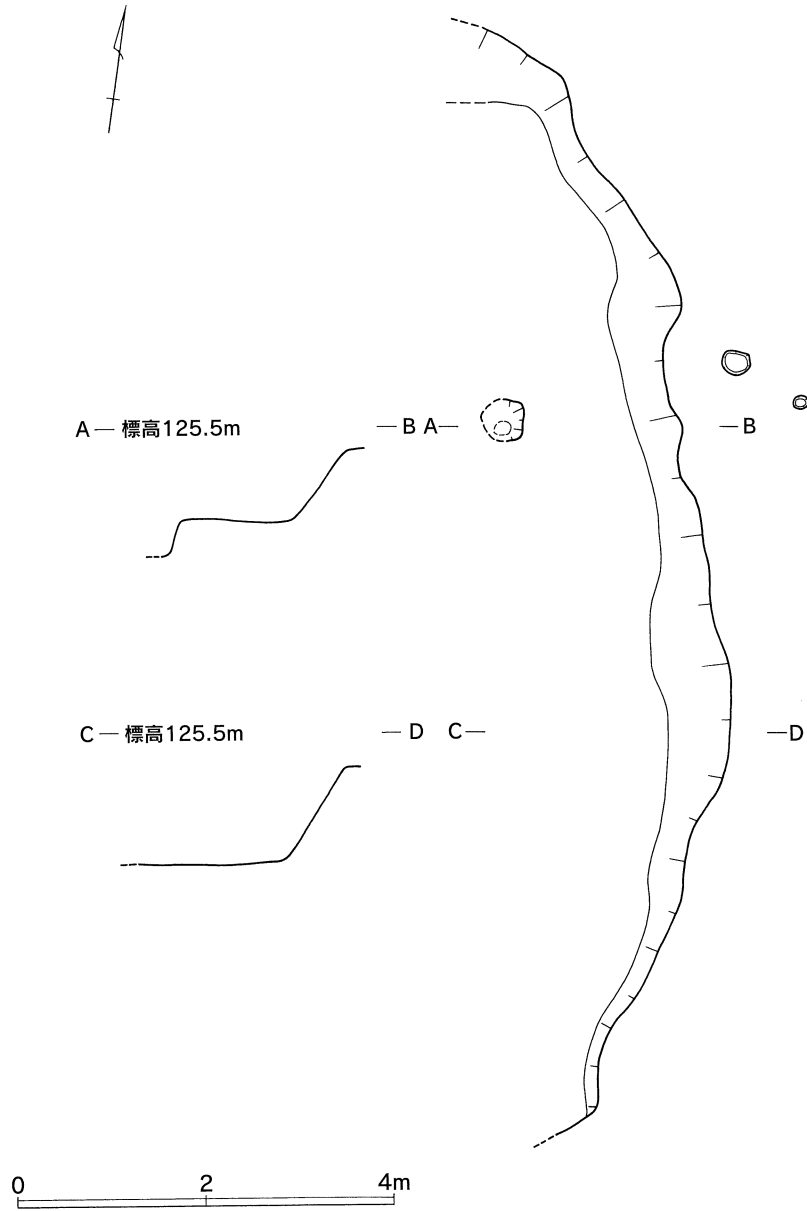
3号弧状遺構とその周辺から出土した土器である。34は弥生土器の甕底部である。低い上げ底を呈する。表面刷毛目、内面ナデ調整。底径5cmを測る。35は須恵器の坏である。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。体部は斜め直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げている。口径11.8cm、底部径7.2cm、器高3.8cmを測る。36は土師器の坏底部である。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。底部径8cm。37は高台付きの底部である。高台は底部の外側に張り出すように付いている。表面は横方向のミガキ、内面はナデ調整。高台径8.2cm。



第334图 新殿岡遺跡1区2号弧状遺構出土遺物実測図② (1/4)



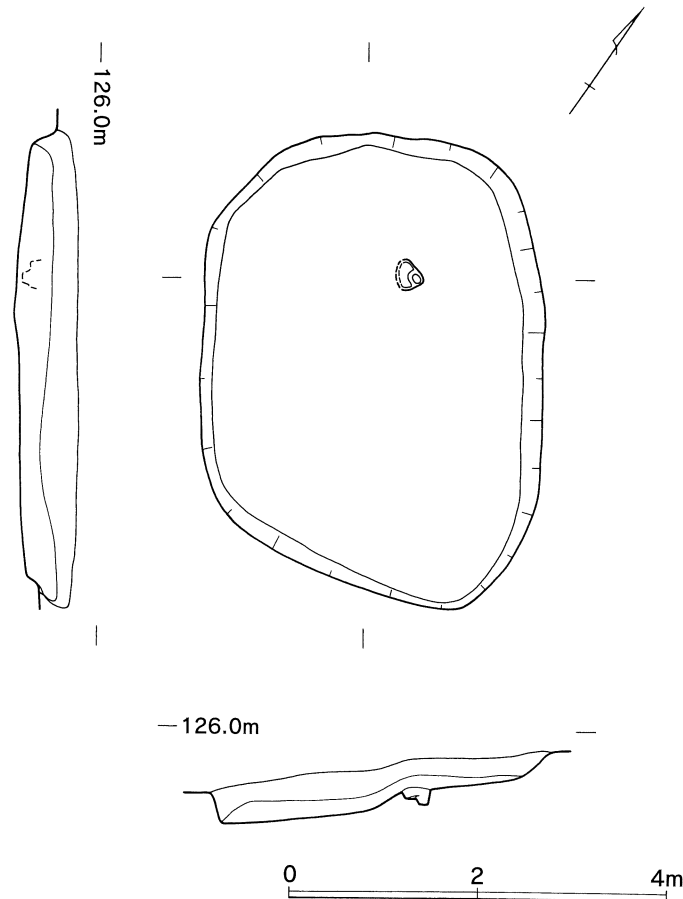
第335图 新殿岡遺跡1区2・3号弧状遺構出土遺物実測図③ (1/3・1/4)



第336図 新殿岡遺跡1区3号弧状遺構実測図 (1/80)

1号楕円状土坑 (第337図)

1区の西端に位置する歪な楕円状土坑である。3号弧状遺構の東側に接して検出された。長軸を北・南にとり、長径4.95m、短径3.6mを測る。確認面から床面までは30~40cmである。地形の傾斜方向に土坑床面が傾いている。

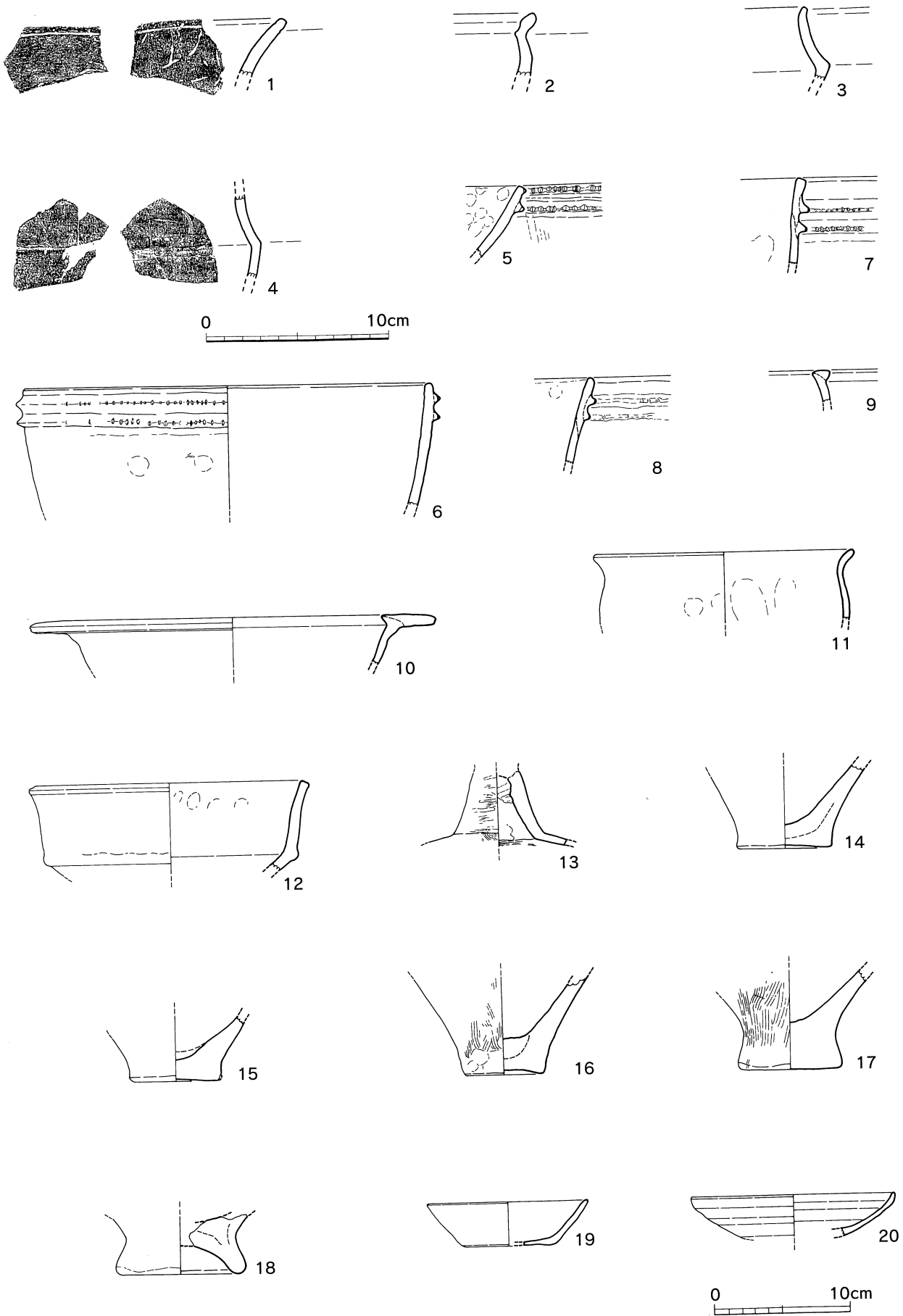


第337図 新殿岡遺跡1区楕円形土坑実測図 (1/80)

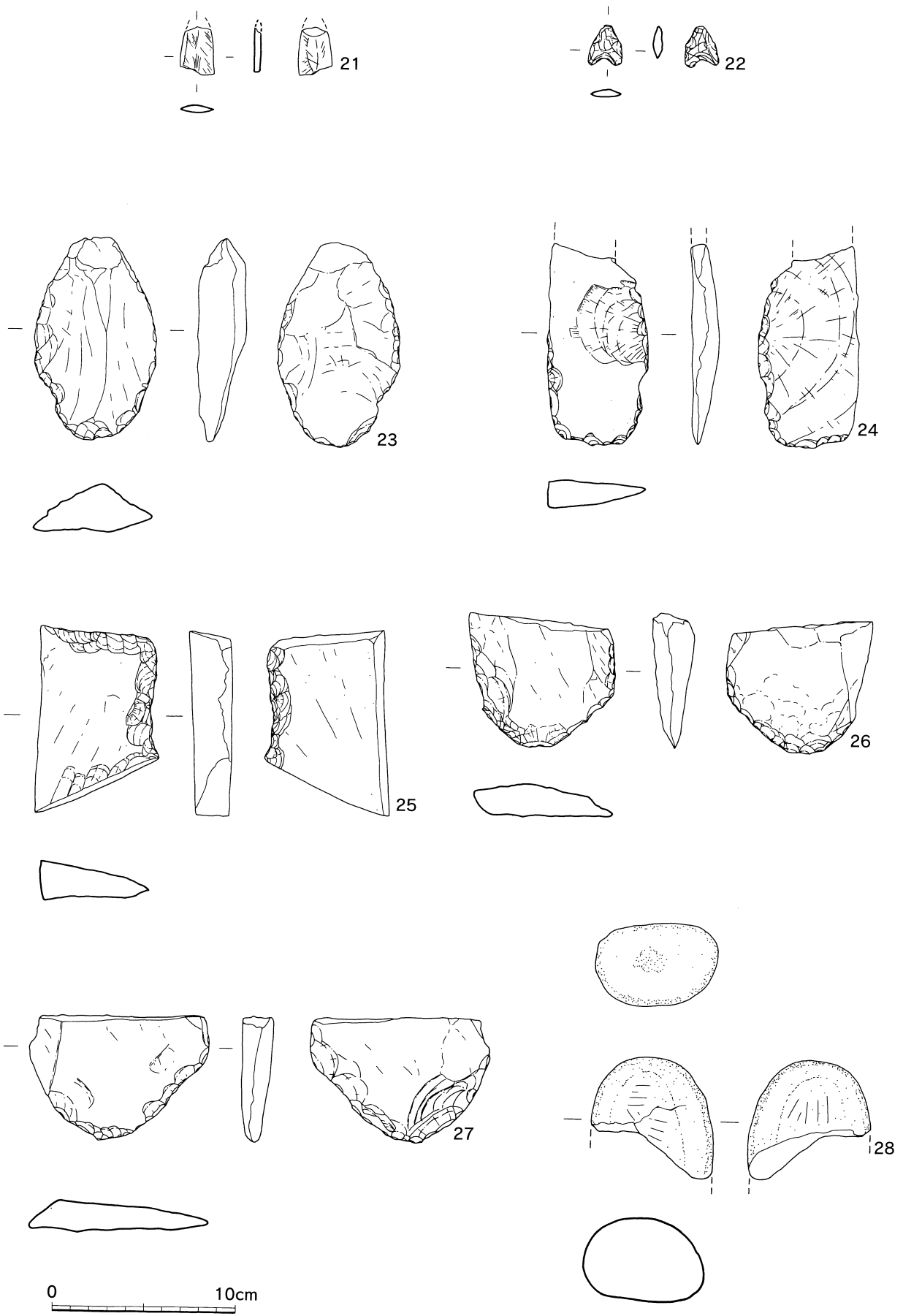
新殿岡遺跡1区出土遺物 (第338・339図)

1～4は縄文後晩期の土器である。1は深鉢形土器である。緩く外反した口縁部の表裏には一条の沈線文が廻る。表裏はナデや磨き調整。2は屈折する口縁部の浅鉢形土器である。口縁部内側に段を持ち、口縁部をやや肥厚させる。表裏はナデや磨き調整。3は口縁部の断面を逆「く」の字に立ち上がる浅鉢形土器。表裏ナデ調整。4は浅鉢形土器の屈折する胴部である。表裏はナデや磨き調整。

5は下城式土器の鉢である。口縁部は心持ち内湾しつつ外傾する。口唇は面取りされて外側へ摘み出され刻み目を施す。口縁直下には一条の断面三角形の刻み目突帯が廻る。表面は刷毛目、内面は指頭状のナデ押さえを施す。6～8は下城式土器の甕である。6は心持ち内湾しつつ立ち上がる口縁部で、口縁直下には二条の断面三角形の刻み目突帯が廻る。表面は刷毛目のちナデ、内面はナデを施す。口径約30cm。7、8は外傾口縁であり6と同じ形態となる。9は内湾する口縁部であり、口唇部は外に張り出し厚い。口縁断面は三角状を呈する亀ノ甲タイプの甕形土器である。表裏ナデ調整。10は鋤先状を呈する須玖式土器の口縁部である。口径29.6cmを測る。11は緩く外反しながら短く立ち上がる甕の口縁部である。胴部最大径は上位にあり、胴の張りも弱い。表裏は指頭痕を残すナデ調整。口径19cm、頸部径17.5cm、胴部最大径18.3cmである。12は心持ち外反しながら直立気味に立ち上がる複合口縁部である。口径20.6cmで表裏ナデ調整。弥生終末～古墳時代初頭期のものである。13は高坏の脚である。脚部は開きつつ、下位で明瞭な屈折点を持って、裾部へ向かって大きく開く特徴的なものである。脚上半の表面は横方向のヘラ磨きを残し、表裏面は刷毛目やナデ調整。古墳時代前葉期のものである。14～18は弥生時代前期末～中期の甕の底部である。14、15は表裏ナデ調整で心持ち上げ底気味。14は底径7cm。15は底径6.2cm。16、17は表面縦の刷毛目で内面ナデ調整。16は心持ち上げ底気味で底径5.6cm。17の底壁は分



第338图 新殿岡遺跡1区出土遺物実測図① (1/4)



第339图 新殿岡遺跡 1区出土遺物実測図② (1/3)

厚く、側面は括れ込む。底径7.7cm。18は大きな空間になる上げ底で側面は括れ込む。表裏ナデ調整。底径8.6cm。

19は土師器の坏である。口縁部から斜めに底部に至る。底部は回転糸切り離しである。表裏ロクロナデ調整。表裏摩滅が著しい。口径11.8cm、底径6.6cm、器高3.3cmを測る。時期は中世。20は土師器の坏である。口縁部は丸く肥厚し、体部は浅い椀形を呈する。底部は欠損している。表裏ロクロナデ調整。口径14.7cm。

21は弥生時代の粘板岩製の磨製石鏃の破片である。横幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。22は縄文時代の凹基式の打製石鏃である。長さ2.4cm、横幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.3g。

23~27はいわゆる扁平打製石斧である。23は長楕円形の横長剥片の周囲に加工を施した完形品である。縦長10.7cm、横長6.5cm、厚さ2.5cm、重さ171.4g。24は短冊形の横長剥片を使用したもの。刃部を大きく欠損している。片面には表皮を残す。縦長10.2cm+ α 、横長5.3cm、厚さ1.5cm、重さ113.7g+ α 。25は扁平打製石斧側片の一部に表裏の加工痕跡を留めた破片である。縦長9.8cm+ α 、横長6.5cm+ α 、厚さ1.8~2.1cm、重さ154.1g+ α 。表面上下の加工痕は破損後に再利用を意図した加工痕跡。26、27は扁平打製石斧の刃部である。26は縦長6.7cm+ α 、横長7.6cm、厚さ1.9cm、重さ121.3g+ α 。27の表裏の加工痕上に一部研磨状の使用痕が残っている。縦長6.7cm+ α 、横長9.7cm、厚さ1.6cm、重さ127.5g+ α 。

28は磨石・敲石として使用した拳大の川原礫の破片である。表裏に使用した研磨痕と敲いた痕跡を残す。縦長5.4cm+ α 、横長6.4cm、厚さ4.5cm、重さ204.4g+ α 。

新殿岡遺跡2区

1号掘立柱建物(第340図)

Ⅱ区の北端に位置する一間×一間の掘立柱建物である。長軸を北・南にとり、長径3.95m、短径2.07mを測る。柱穴の径は30~40cm、深さは18~35cmを測る。2号掘立柱遺構と切り合う関係にある。

2号掘立柱建物(第341図)

Ⅱ区の北端に位置する一間×一間の掘立柱建物である。長軸を北・南にとり、長径4.05m、短径2.2mを測る。柱穴の径は20~30cm、深さは15~25cmを測る。1号掘立柱遺構と切り合う関係にある。

3号掘立柱建物(第342図)

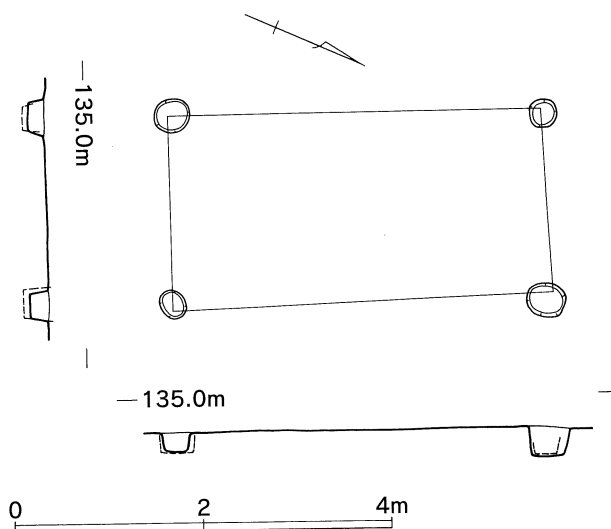
Ⅱ区の南端に位置する一間×一間の掘立柱建物である。長軸を北・南にとり、長径4.00m、短径3.33mを測る。柱穴の径は25~55cm、深さは20cmを測る。4号掘立柱遺構と切り合う関係にある。

4号掘立柱建物(第343図)

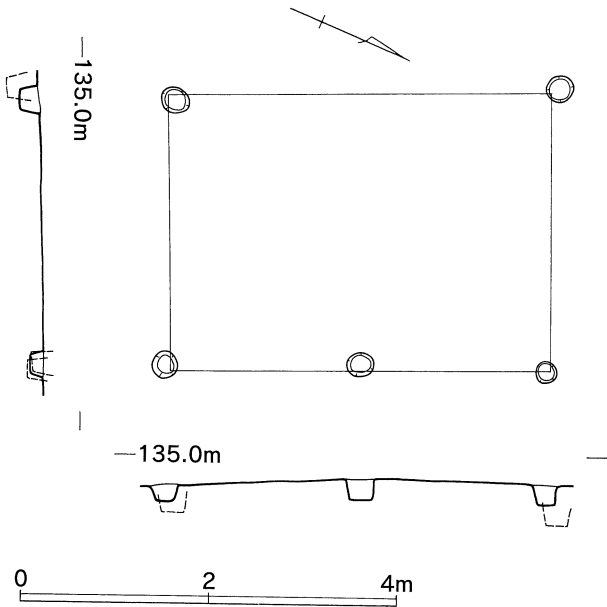
Ⅱ区の南端に位置する二間×一間の掘立柱建物である。長軸を北・南にとり、長径3.70m、短径3.40mを測る。柱穴の径は10~55cm、深さは20~40cmを測る。3号掘立柱遺構と切り合う関係にある。

5号掘立柱建物(第344図)

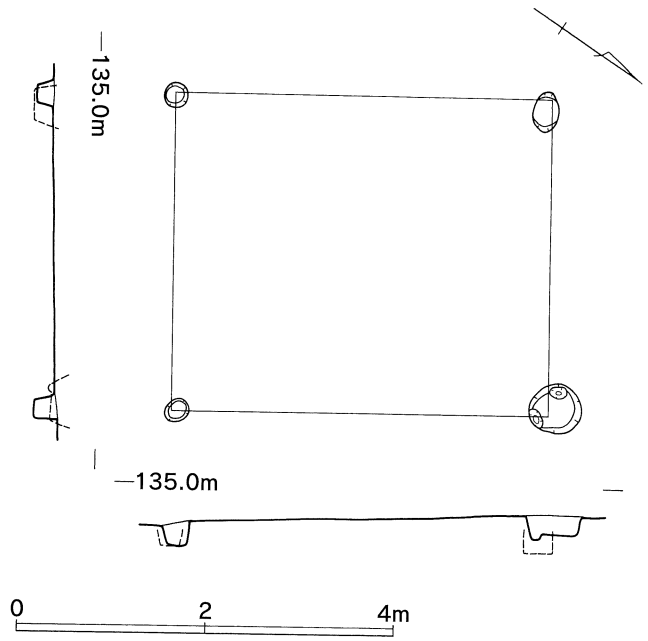
Ⅱ区の北端に位置し、2号掘立柱建物と切り合う関係にある。長軸を南北にとり、長径3m、短径1.6mを測る。



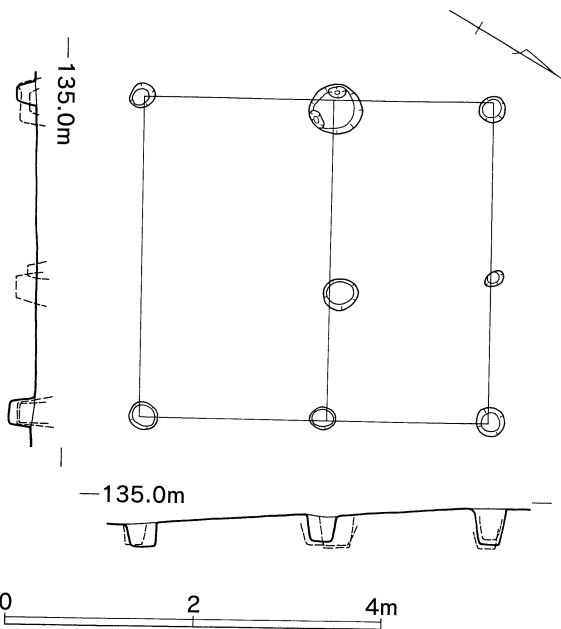
第340図 新殿岡遺跡2区1号掘立柱建物実測図(1/80)



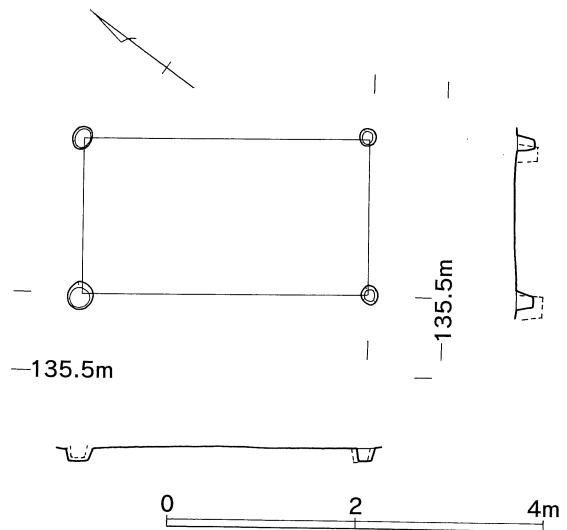
第341图 新殿岡遺跡2区2号掘立柱建物実測図(1/80)



第342图 新殿岡遺跡2区3号掘立柱建物実測図(1/80)



第343图 新殿岡遺跡2区4号掘立柱建物実測図(1/80)



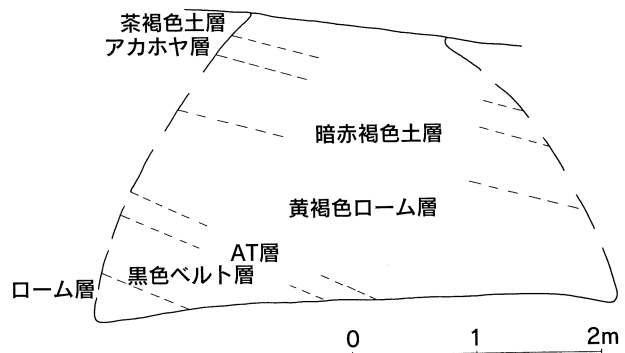
第344图 新殿岡遺跡2区5号掘立柱建物実測図(1/80)

新殿岡遺跡3区

1号土坑（第345図）

3区の東端部に位置する円状袋状の土坑である。いわゆる袋状貯蔵穴と呼称されるものである。確認面での平面図は、直径約150cmの歪な円形を呈する。土坑は袋状を呈しており、底部に近づくにつれて広くなり、底径で約420cm、深さは約250cmを測る。覆土内には土器の細片が少量出土している。

この遺構は発掘調査の途中で、豪雨のために自然崩壊してしまい完掘した実測図や写真撮影はない。調査途中で一部実測、計測した資料で復元してみると第346図のような復元形状となる。土坑は弥生中期の所産であろう。土層は土坑外自然堆積層である。



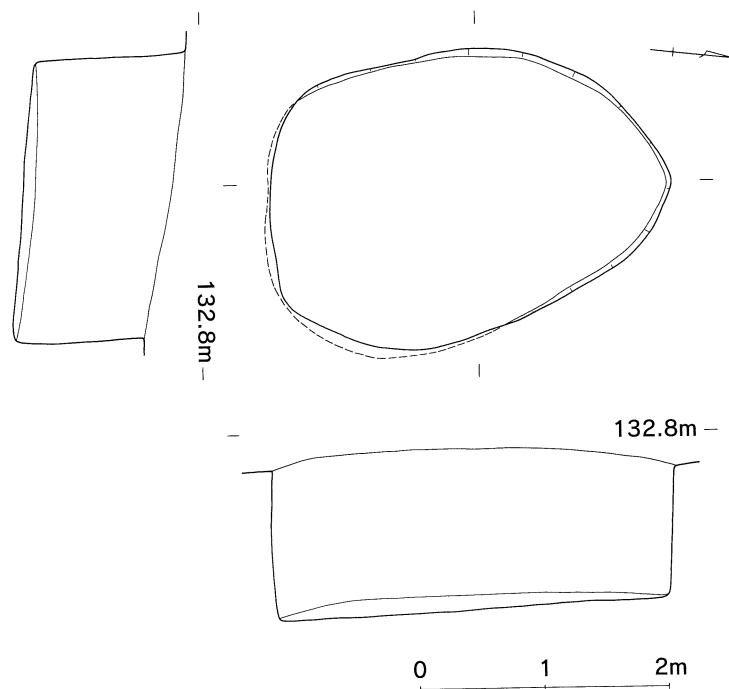
第345図 新殿岡遺跡3区1号土坑略測図 (1/60)

2号土坑（第346図）

3区の北東部に位置する歪な楕円状土坑である。3号土坑に接して検出されている。長軸を略南北にとり、長径3.3m、短径2.3mを測る。確認面から床面までは1.2mである。土坑の南側は心持ちオーバーハングしている。出土遺物から時期は古代、8世紀末～9世紀の所産であろう。

出土遺物（第350図1～4）

1は甕形土器の外反する口縁部である。口径15cm、頸部12.4cmである。表裏ナデ調整。2は土師質土器の蓋の撮みである。撮みの直径は3cmでボタン状を呈する。3は土器片加工品である。周囲に粗い研磨を施し、直径4～4.5cmの歪な円形を呈する。4は姫島産黒曜石を使った凹基式の石鏃である。縦2.7cm、横2cm、厚さ0.6cm、重さ2.6g。



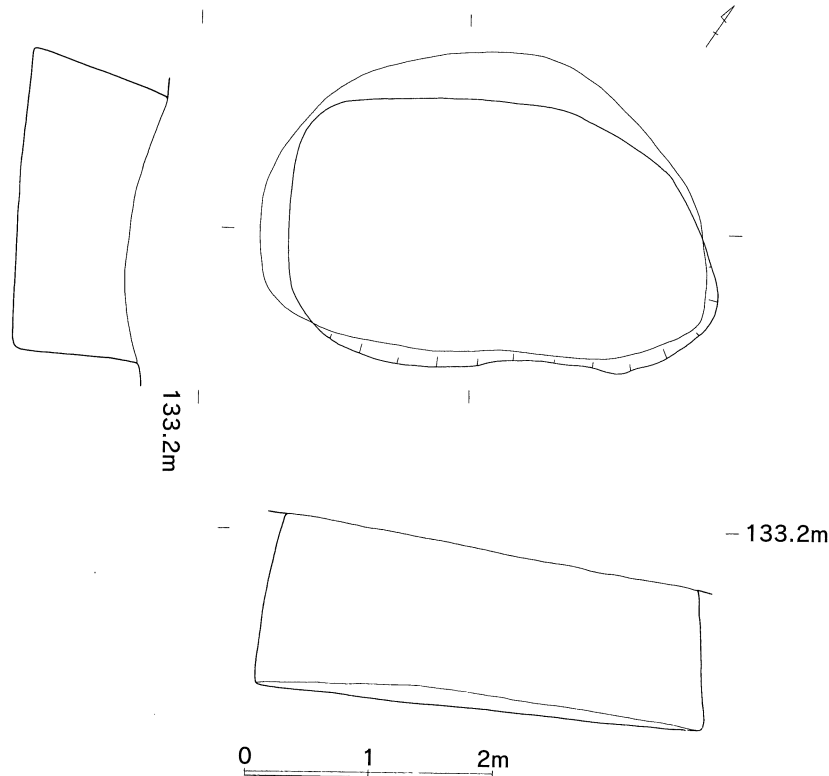
第346図 新殿岡遺跡3区2号土坑実測図 (1/60)

3号土坑（第347図）

3区の北東部に位置する歪な楕円状土坑である。2号土坑に接して検出されている。長軸を略東西にとり、長径3.75m、短径2.55mを測る。確認面から床面までは1～1.4mである。土坑の北側で40cm、西側で25cmのオーバーハングをしている。出土遺物から時期は古代、8世紀末～9世紀の所産であろう。

出土遺物（第350図5～10）

5は土師器の坏の口縁部である。6は平底であり底径7.2cm。7は丸平底の底部。8は口縁部下に断面三角突帯を施す。9は脚台のような上げ底部である。底径8.6cmである。10は折れた棒状の川原礫である。表裏を磨石に使用し、先端部は敲石として使用している。縦7cm+α、横4.7cm、厚さ2.9cm、重さ166.5cm。



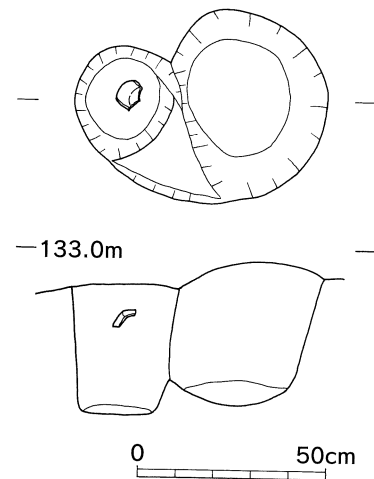
第347図 新殿岡遺跡3区3号土坑実測図 (1/60)

4号土坑（第348図）

3区の南東端に位置し、一間×一間の1号掘立柱遺構と平面的には重なる地点である。当初は長軸67cm、短軸52cmの小型土坑として調査したが、結果的には二本の柱穴が一部重複した遺構であることが判明している。出土遺物の検出は、直径約30cm、深さ約35cmの柱穴の中央部で、柱穴底面から約25cm上の位置である。

出土遺物（第350図11）

11は土師器の坏である。口縁端部は肥厚し丸く仕上げられ、口縁部から斜め直線的に延びた器壁は細くなり、底部付近で再び丸く肥厚する。底部は回転ヘラ切離しである。僅かに上げ底状の平底を呈する。体部内外面はロクロナデ調整が行われている。口径14cm、底径8.2cm、器高3.5cmを測る。時期は古代、8世紀末～9世紀の所産であろう。



第348図 新殿岡遺跡3区4号土坑実測図 (1/20)

5号土坑（第349図）

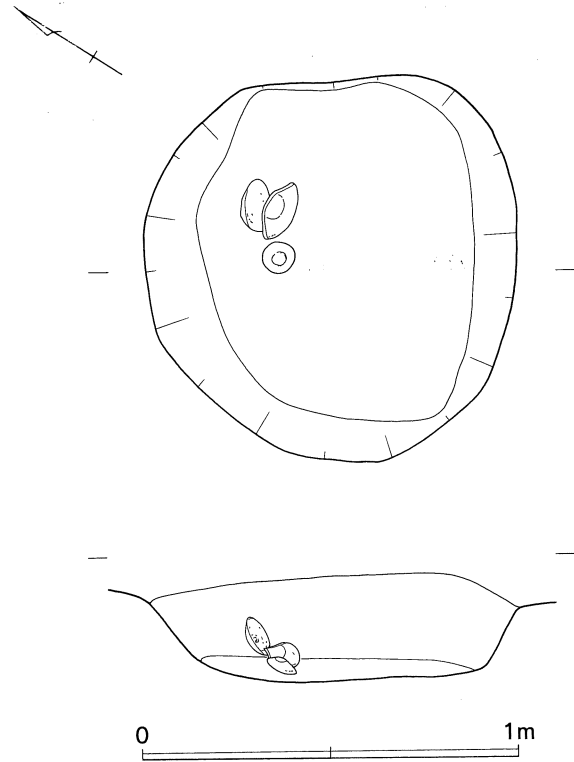
3区の南端部に位置する円形状土坑である。外形は直径約1mの円形を呈するが、内形は長軸を略東東西にとり、長径91cm、短径73cmを測る。標高133.400mの確認面から床面までは27cmである。土坑の北側中央部で、ほぼ完形の土師質土器が3点、共伴関係で出土している。時期は中世、15世紀末～16世紀初頭の所産である。

出土遺物（第350図12～14）

12は土師器の坏である。口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部から斜め直線的に底部まで延びる。底部は回転糸切離しで板状圧痕が残っている。僅かに上げ底状の平底を呈する。体部外面はロクロナデ調整が行われ、体部内面は階段状に段々に器面整形が行われている。口径11.5cm、底径6.4cm、器高3.1cmを測る。時期は中世、15世紀末～16世紀初頭の所産である。

13は土師器の坏である。口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部から斜めに延びつつ僅かに内湾して底部に至る。底部は回転糸切離しで、僅かに上げ底状の平底を呈する。体部内外面はロクロナデ調整が行われている。口径11.9cm、底径4.8cm、器高3.6cmを測る。時期は中世、15世紀末～16世紀初頭の所産である。

14は土師器の小皿である。口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部から斜め直線的に底部まで延びる。底部は回転糸切離しで、僅かに上げ底状の平底を呈する。体部内外面はロクロナデ調整が行われている。口縁端部に煤の付着がある。油煙痕と考えられ灯明皿として使用されたものである。口径8.4cm、底径4.1cm、器高2.2cmを測る。時期は中世、15世紀末～16世紀初頭の所産である。



第349図 新殿岡遺跡3区5号土坑実測図（1/20）

1号掘立柱遺構（第351図）

3区の南東端に位置する一間×一間の掘立柱建物である。長軸を南北にとり、長径3.83m、短径2.2mを測る。柱穴の径は35～38cm、深さは35～40cmを測る。

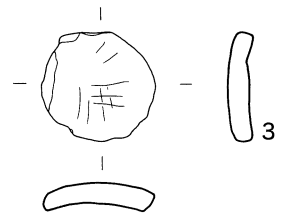
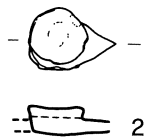
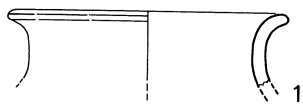
2号掘立柱遺構（第352図）

3区の中央部やや北寄りに位置する一間×一間の掘立柱建物である。長軸を南北にとり、長径4m、短径3.2mを測る。柱穴の径は35～55cm、深さは10～40cmを測る。

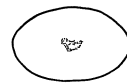
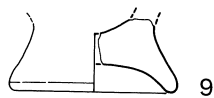
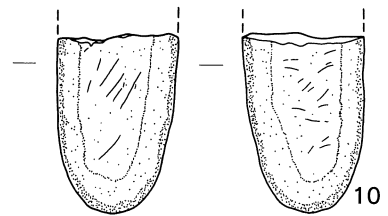
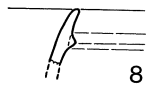
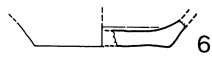
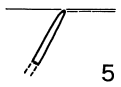
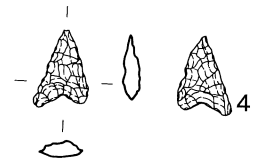
掘立柱遺構の中心には長径1.2m、短径75cm、深さ20cmの楕円状土坑が遺存しており、中心に掘り込み炉跡を持つ竪穴住居跡が、床面の削平を受けていた場合には、このような遺存状態になることも推測できる。

3号掘立柱遺構（第353図）

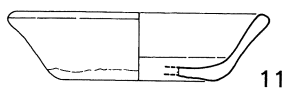
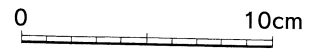
3区の南端に位置する二間×一間の掘立柱建物である。長軸を東西にとり、長径は2.10m+2.10mの4.20m、短径4.03mを測る。柱穴の径は35～55cm、深さは20～50cmを測る。



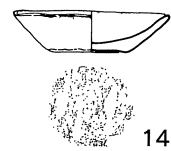
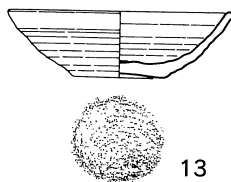
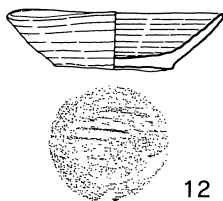
2号土坑内出土遺物 (1~4)



3号土坑内出土遺物 (5~10)



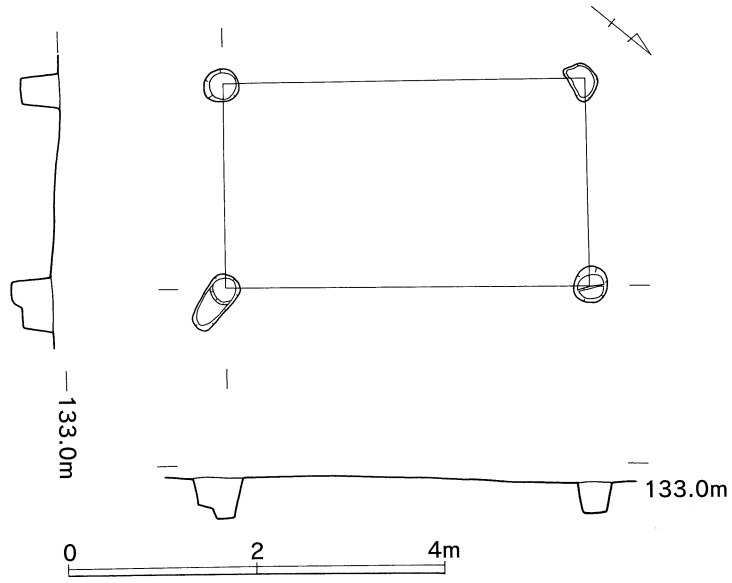
4号土坑内出土遺物 (11)



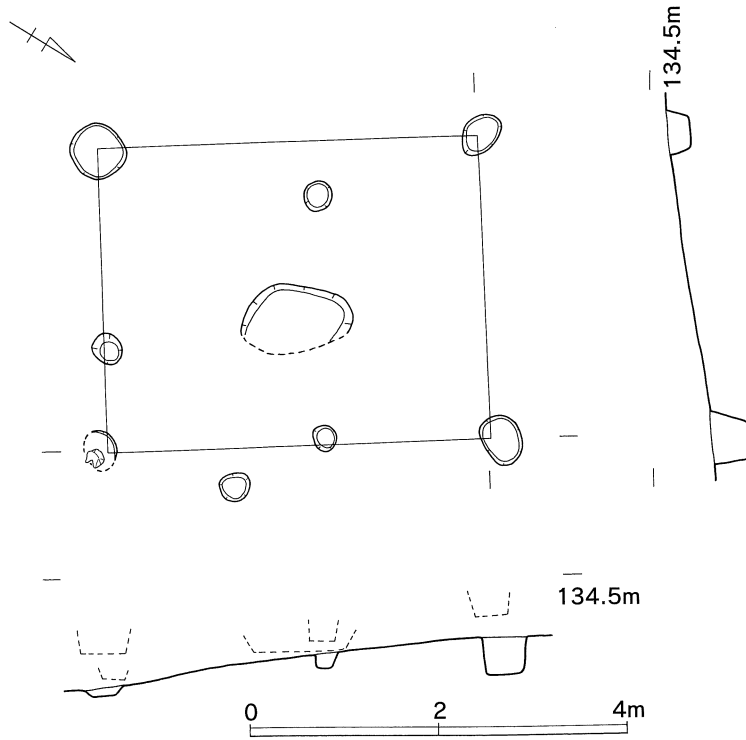
5号土坑内出土遺物 (12~14)



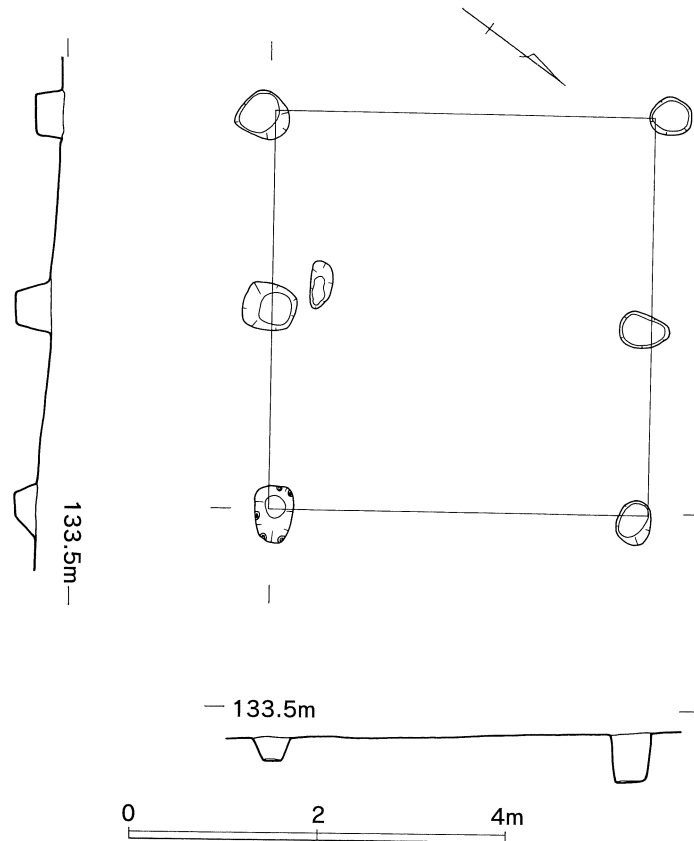
第350图 新殿岡遺跡3区2~5号土坑出土遺物実測図 (1/3·1/4)



第351图 新殿岡遺跡3区1号掘立柱建物実測図 (1/80)



第352图 新殿岡遺跡3区2号掘立柱建物実測図 (1/80)



第353図 新殿岡遺跡3区3号掘立柱建物実測図 (1/80)

1号炉跡

調査区の北東部にある炉跡である。焼土と炭化物、灰層が混じったものが径約1.5mの範囲に遺存していた。その周囲には石皿や多数の土器が伴出していた。炉跡は2号土坑、3号土坑に接して位置している。時期は古代、8世紀末～9世紀の所産であろう。

出土遺物 (第354図)

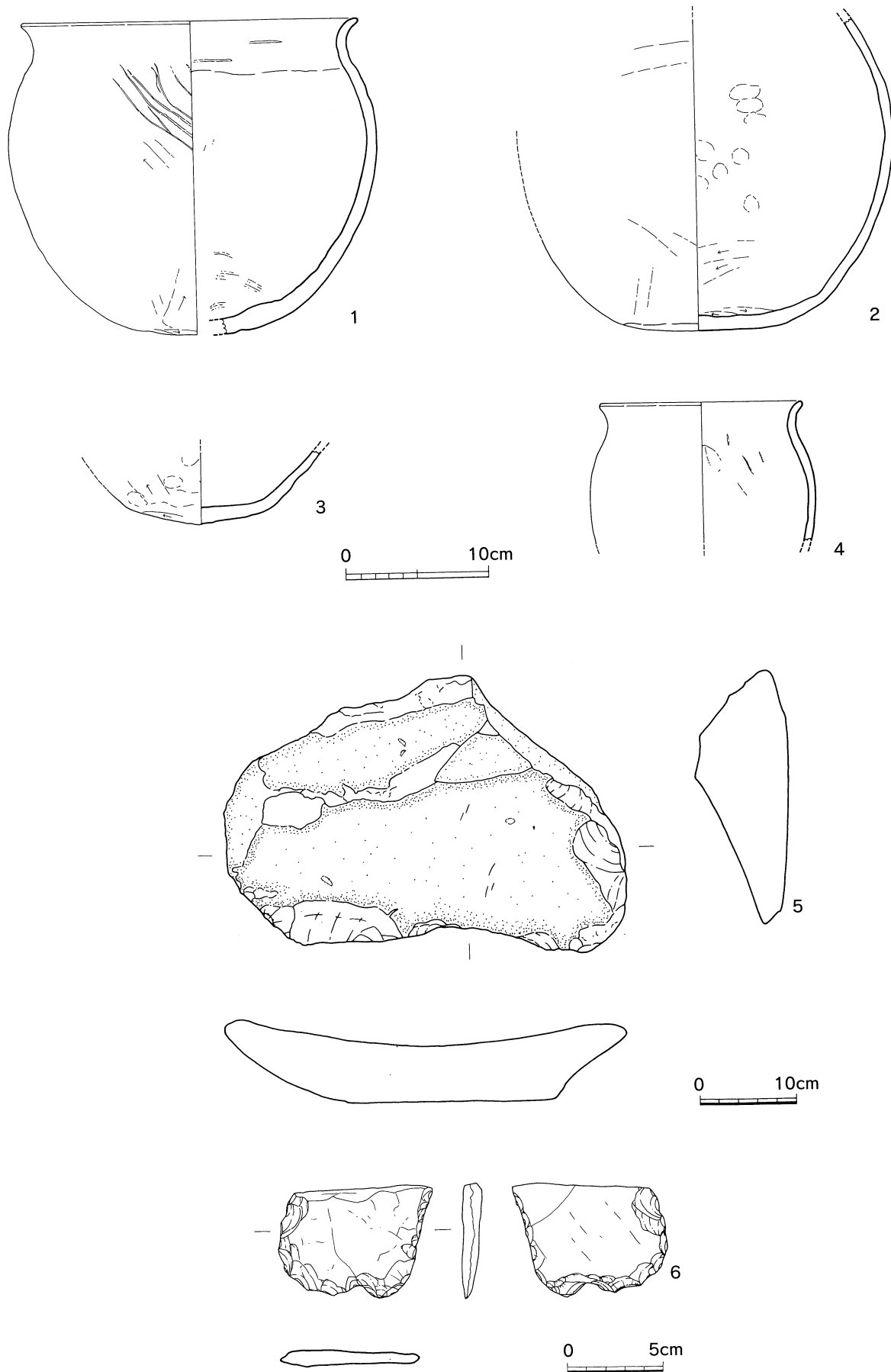
1は土師器の甕である。口縁部は短く外反し、頸部で心持ち締まって胴部が球形になり、そのまま丸底部へ続く。表面は下から上への削りをナデ消す。調整時に動いた砂粒の軌跡がそのまま残っていた。内面は斜め刷毛目をナデ消している。二次被熱による赤変は顕著である。口径23.6cm、頸部21.8cm、底部径6.5cm、器高21.7cmを測る。

2は土師器の甕である。口縁部～頸部は欠損し、胴部が球形になり、そのまま丸底部へ続く。表面は削りをナデ消す。内面の削りもナデ消して、指頭状の痕跡を残す。二次被熱による赤変は顕著である。胴部径26cm、底部径11cmを測る。

3は土師器の底部である。底部の器壁は僅かに厚くなり中央部が心持ち突出する。表裏とも、削り後に指押さえのナデ消し。底部径は10cm。

4はやや小型の土師器の甕である。外反口縁部の立ち上がりは短く、胴部の張りは少ない。底部は欠損している。表裏はナデ調整。二次被熱による赤変は顕著である。口径14.2cm、頸部径12.9cm、胴部径15.5cm。

5は凝灰岩製の石皿である。最大横長41.5cm、縦幅26.3cm、厚さ9.8cm、重さ10kg。皿状の窪みが顕著である。



第354图 新殿岡遺跡3区1号炉跡出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/6)

6は縄文時代後晩期の扁平打製石斧である。基部を欠損している。最大横長7.3cm、縦幅5.6cm、厚さ0.9cm、重さ57.2g。

包含層出土資料

縄文時代の土器、石器（第355図）

1～14は縄文時代後期～晩期の土器である。

1は直立した口縁部に、凹線状の沈線文を施文している。薄い器壁のため内側に凹凸の影響が出現している。2は条痕地文に沈線文。3は二本沈線を基調としたもの。4は内湾する口縁部外面に三条の沈線文が廻る。

5～7は深鉢形土器の口縁部～頸部である。口縁部は緩く外反し、頸部で「く」の字に折れて胴部が誇張されるものである。口唇端部を丸くおさめ、内側口縁下には一条の沈線文を施文している。表裏はナデ調整され、部分的に指頭痕を残すナデやヘラ状工具での磨きがみられる。

8、9は突帯文土器の口縁部である。口縁直下に断面三角形の突帯が一条廻っている。

10～13は浅鉢形土器の口縁部である。10は短く立ち上がる外傾口縁部から丸く誇張された胴部に至る浅鉢である。11の胴部は球形に誇張される。12の口縁部直下には浅い沈線状の段を施す。13の口縁部にはりボン状の貼り付け文を施文し、内側口縁直下に浅い沈線状の段を施す。

14はいわゆる円盤貼り付けの底部である。底径9.3cmで上げ底を呈する。表裏条痕調整の後にナデ調整。外面に指頭圧痕を残している。

15は平基式の石鏃である。石材はサヌカイト製長さ3.1cm、幅2.2cm、厚さ0.45cm、重さ3.3g。16は二次加工痕のある剥片。17、18は扁平打製石斧の破片である。17は体部の破片で、幅5.8cm、厚さ1cmを測る。18は刃部である。幅4.6cm、厚さ0.8cmを測る。19は川原礫の磨石の破片である。使用面は表裏にある。安山岩製で幅8.2cm、厚さ4.9cmを測る。

弥生時代～古墳時代の土器（第356図）

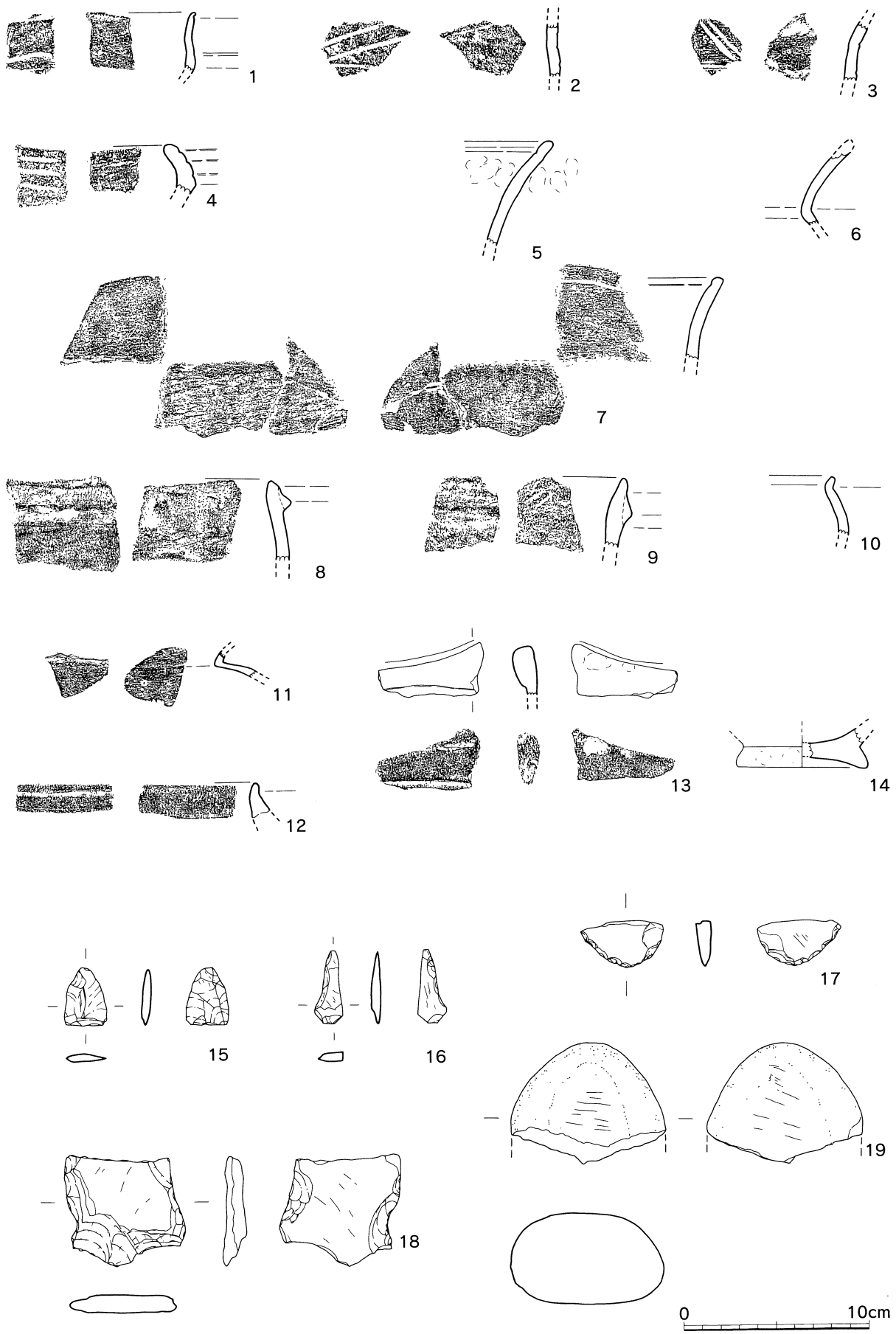
20は下城式土器に伴う壺形土器の胴部である。半裁竹管文を用いた二本単位の重弧文を胴部の上半と下半に複数施文する。21は壺形土器の頸部である。断面三角形の突帯が三条貼付けている。

22～26は下城式土器の甕である。22の口縁部は直立し、端部は水平に面取りされている。外面直下に断面三角形の突帯が一条廻る。突帯には不等間隔に刻み目を施している。表面は刷毛目、内面はナデ調整。底部を大きく欠損している。口径13.2cm。23は口縁下に一条の刻み目突帯を施し、口唇端部にも同様の刻み目が施文されている。表面は刷毛目、内面はヘラ磨き調整。24は口縁下に二条の刻み目突帯を施す。表裏面はナデ調整。25は口縁下に一条の突帯を施しているが剥落している。表面は刷毛目、内面はナデ調整。26の口縁部はやや外傾し、端部は斜めに面取りされている。口縁下に断面三角形の刻み目突帯が一条廻る。表面は刷毛目、内面はナデ調整。

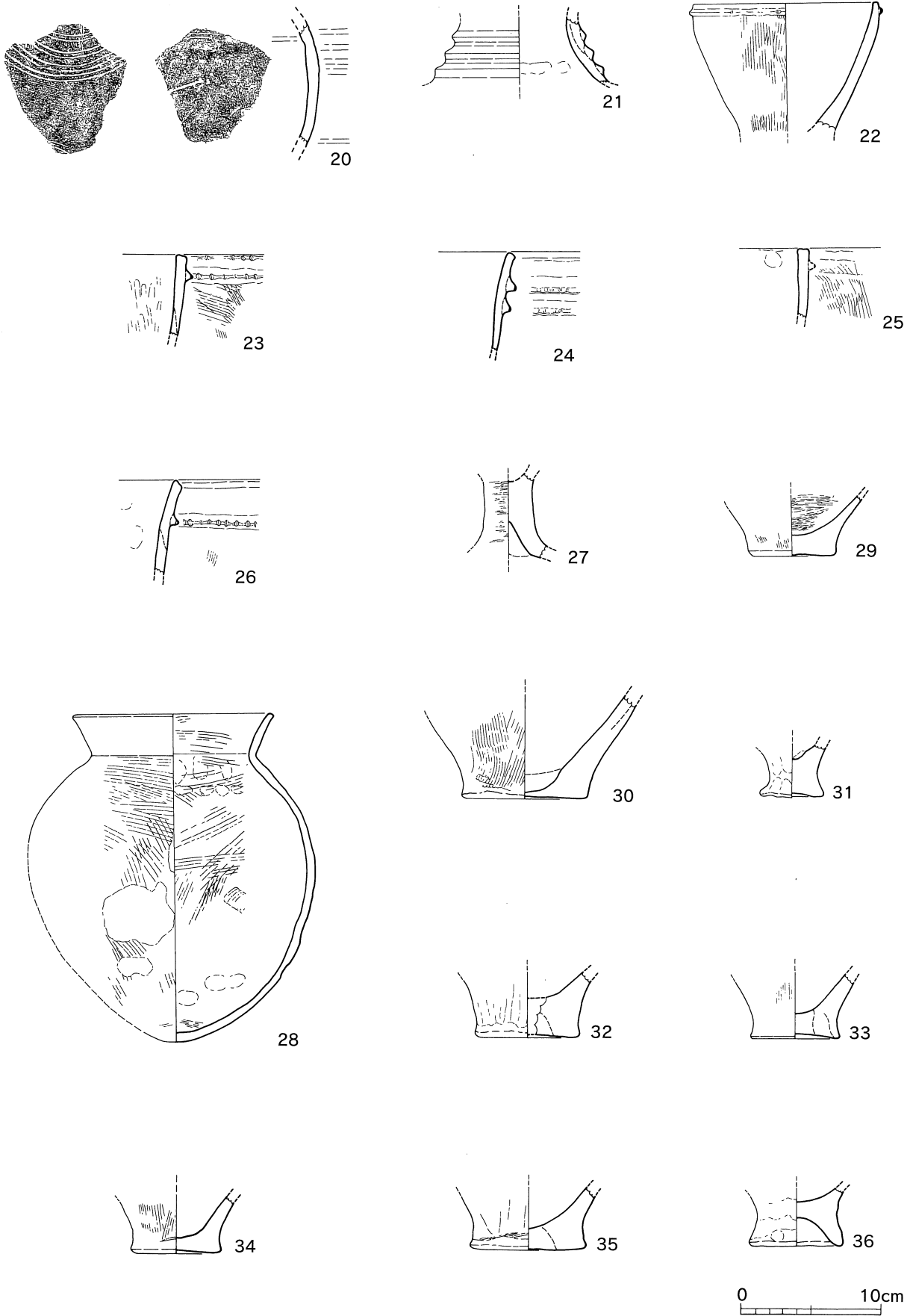
27は高坏の脚部である。表面は横方向の磨き、内面はナデ調整。脚柱内部は稜線を形成し、脚裾部へ向かって開く。脚柱部中央で3.4cm。

28は古墳前期の甕形土器である。口縁部の断面は「く」の字状で口唇端部は面取りされている。胴部は全体的にやや歪んだ卵形を呈し、胴部最大径は中位にある。底部は尖り気味の丸底を呈する。表裏は刷毛目整形の後、指押さえやナデ調整。表面は二次被熱による剥落が複数ある。口径14.4cm、頸部径11.7cm、胴部径20.3cm、器高23.3cmを測る。

29～36は甕形土器の底部である。いずれも、僅かに上げ底状を呈する底部である。表面は縦の刷毛目調整、内面はナデ調整。29は底径6.2cm。30は底径9cm。31、32は僅かに上げ底状を呈する分厚い底部である。表面は縦の磨き、ナデ調整。31は底径4.5cm。32は底径7.4cm。33は底径6cm。34は底径6.2cm。35は表裏ナデ調整で、底径8.2cm。36は顕著な上げ底である。表裏ナデ調整で、底径6.2cmである。



第355图 新殿岡遺跡3区出土遺物実測図① (1/3)



第356图 新殿岡遺跡3区出土遺物実測図② (1/4)

小結

新殿岡遺跡は便宜上1～3区に区分した。1～2区は平成12年度、3区は平成13年度の発掘調査である。遺跡は小規模であるが、遺物としては、縄文後晩期、弥生中期、古墳前期、奈良末～平安時代、中世のものが出土している。

1区は比較的急な西に面した斜面部を形成している。高い位置では標高133m、低い位置では標高125mであり、8m程度の比高差がある地形である。傾斜角度は約13度程度である。地形そのものがすり鉢状の緩やかな弧状を呈し、検出された遺構も等高線に沿うような、三日月状の弧を描く特異な遺構であった。このような弧状遺構は、標高131～132m、標高128～129m、標高125～126mと、約3～4mおきに3基の遺構が上・中・下と三段に位置していた。遺構の時期は出土遺物から奈良末～平安時代のものと推察できる。特異な様相を呈するが、機能的には当時の住居跡と考えてもよさそうである。

2～3区は南へ向かって緩く傾斜するやや平坦な地形である。出土遺構としては、時期不明の掘立柱建物遺構や楕円状の土坑、焼土炉等が出土している。中でも、1号土坑は弥生中期の袋状貯蔵穴と推察されるものであった。2～3号土坑や焼土炉跡は、出土遺物から奈良末～平安時代の8世紀末～9世紀初めの所産と推察できた。一方、5号土坑は中世の土師器が3点、セット関係で出土している。表裏にロクロ状の段々を呈する特徴的なもので中世末の15世紀ごろの所産であろう。

第4章 庵の平遺跡の調査

第1節 調査の概要

大野川の一支流の平野を望む微高地端の南側急斜面に存在する。斜面の地形を段状の平坦地に造作し、石造物を置く一角を設けている。現在、石造物群は一般国道57号中九州横断道の用地にかかり、近接地に移転させられているが、豊後大野市指定有形文化財の笠塔婆をはじめ宝塔2基、五輪塔部材多数が存在していた。調査は発掘調査とともに、移転後の石造物の実測を行った。石造物旧在地の上部畑地にもトレンチを入れたが、ここにおいては、深さ15cm程度の耕作土下に凝灰岩の岩盤が検出でき、遺構・遺物は発見できなかった。凝灰岩の岩盤が地山であることから、この平坦地はかなり大規模な造成によるものと考えられ、旧地形は丘陵状地形であったことが想定できる。

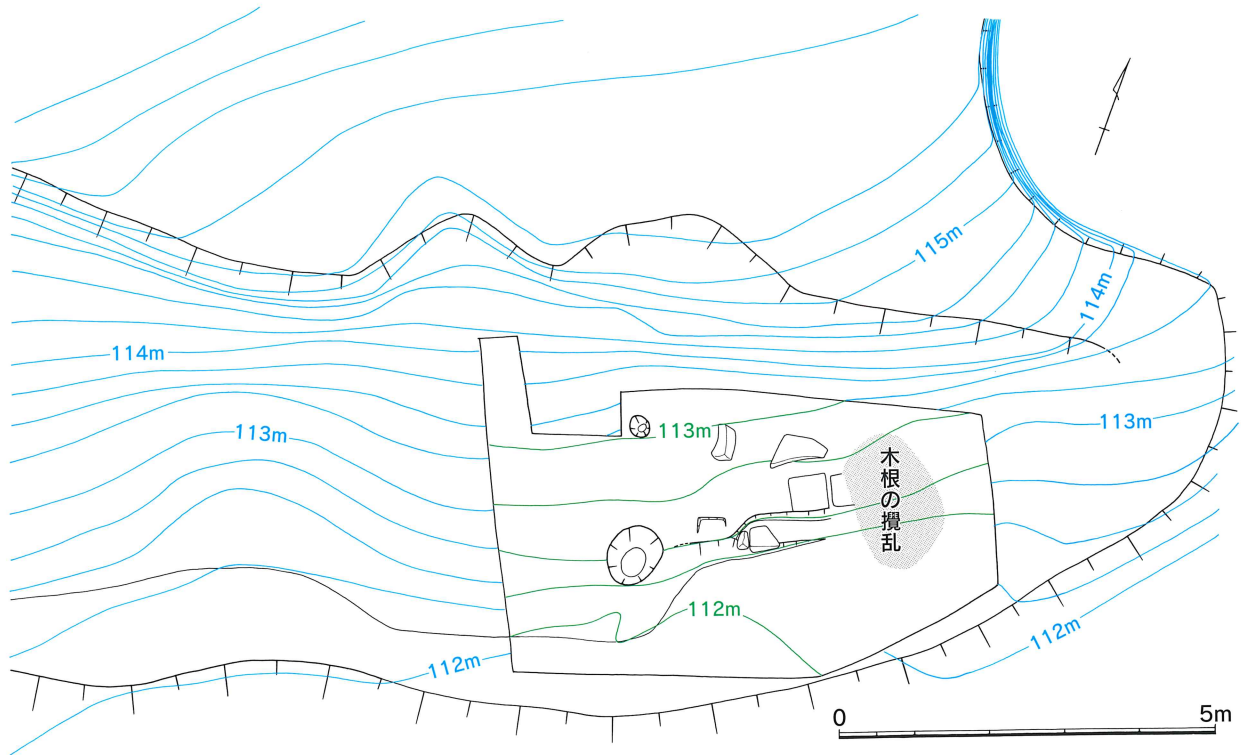
第2節 遺構と遺物

調査区の石塔造立地は、地山である凝灰岩を段状に削りだし、平坦地を造作していた。この石塔造立地の直下には幅1m程度の細い道が丘陵斜面の等高線に沿って走っており、国道57号敷設以前には山付きに人道が走っており、この道の側に石塔群が立てられていたことがわかる。

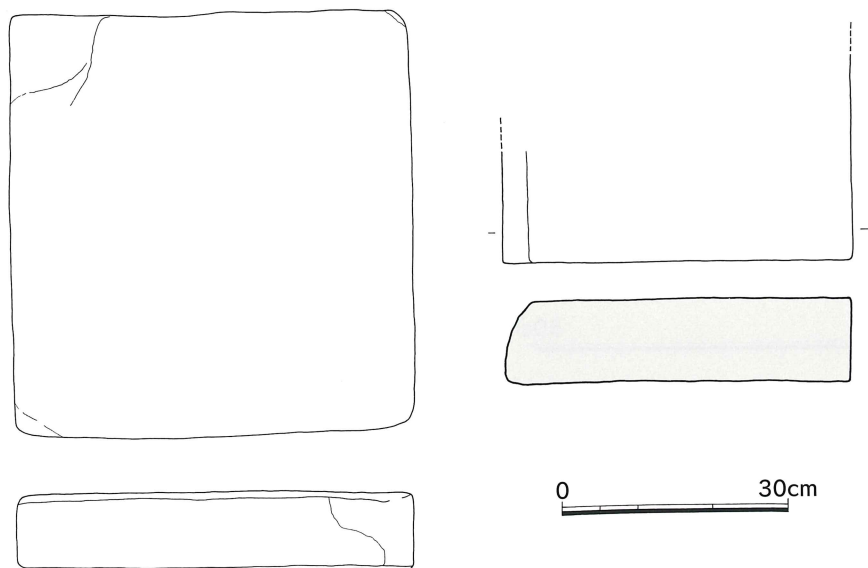
これらの石塔造立地跡には下部構造は発見されておらず、単に石塔を造立したのみであったことがうかがえる。しかし、この石塔造立地跡に向かい、左側には岩盤上に柱穴と考えられる2基の円形ピットが穿たれており、当初は覆屋がかけられていたことも想定できる。しかし、これに対応する石塔群の右側地点は木根の攪乱により、ピット等の痕跡は確認できなかった。



第357図 庵の平遺跡周辺地形図 (1/2,000)



第358図 庵の平遺跡遺構平面図 (1/80)



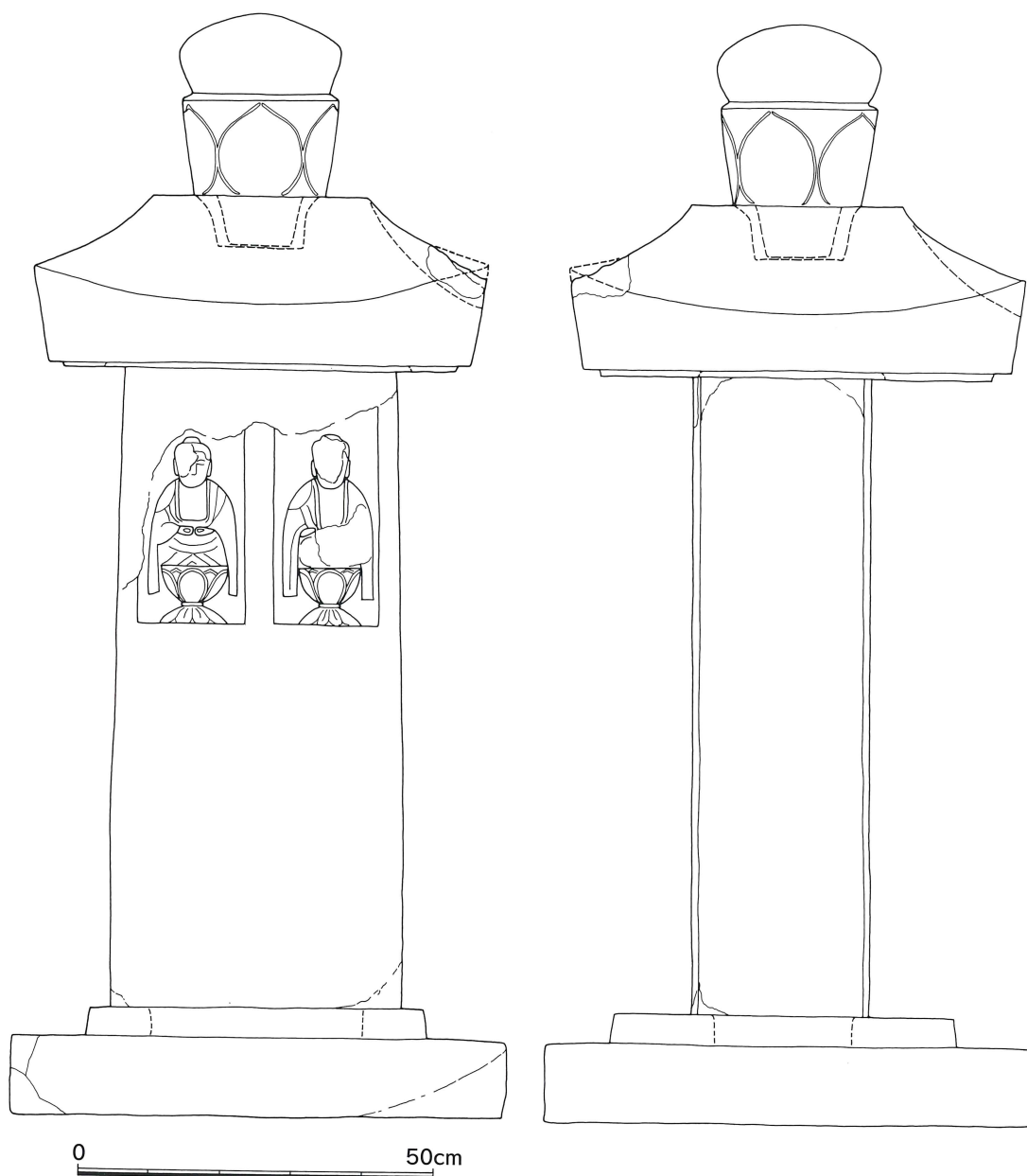
第359図 庵の平遺跡原位置残存石塔実測図 (1/10)

出土遺物は、表土中から戦国期の備前焼をはじめ、近世陶磁器などが出土しているが、明確に石造物と結び付く状態では確認できなかった。

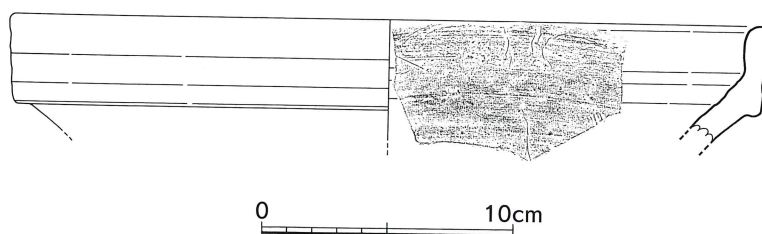
石塔は第359・360・362・363図に示した。いずれも凝灰岩製である。

第359図は石塔移転後に現地に残されていた石塔の基壇石である。1は56×55cm、高さ10cmを測る。また、2は奥行45cm、高さ11cmを測るが、横幅は東側部分が木痕に覆われており、検出できなかった。

第360図は豊後大野市指定有形文化財の笠塔婆である。宝珠は柄をもち、笠上面の柄穴に差し込んでいる。直線的に開く宝珠請花には、細い陰刻線により5弁の蓮弁がめぐらされている。笠部軒の下辺は直線的に延び、上



第360図 庵の平遺跡石塔実測図① (1/10)



第361図 庵の平遺跡出土遺物実測図 (1/3)

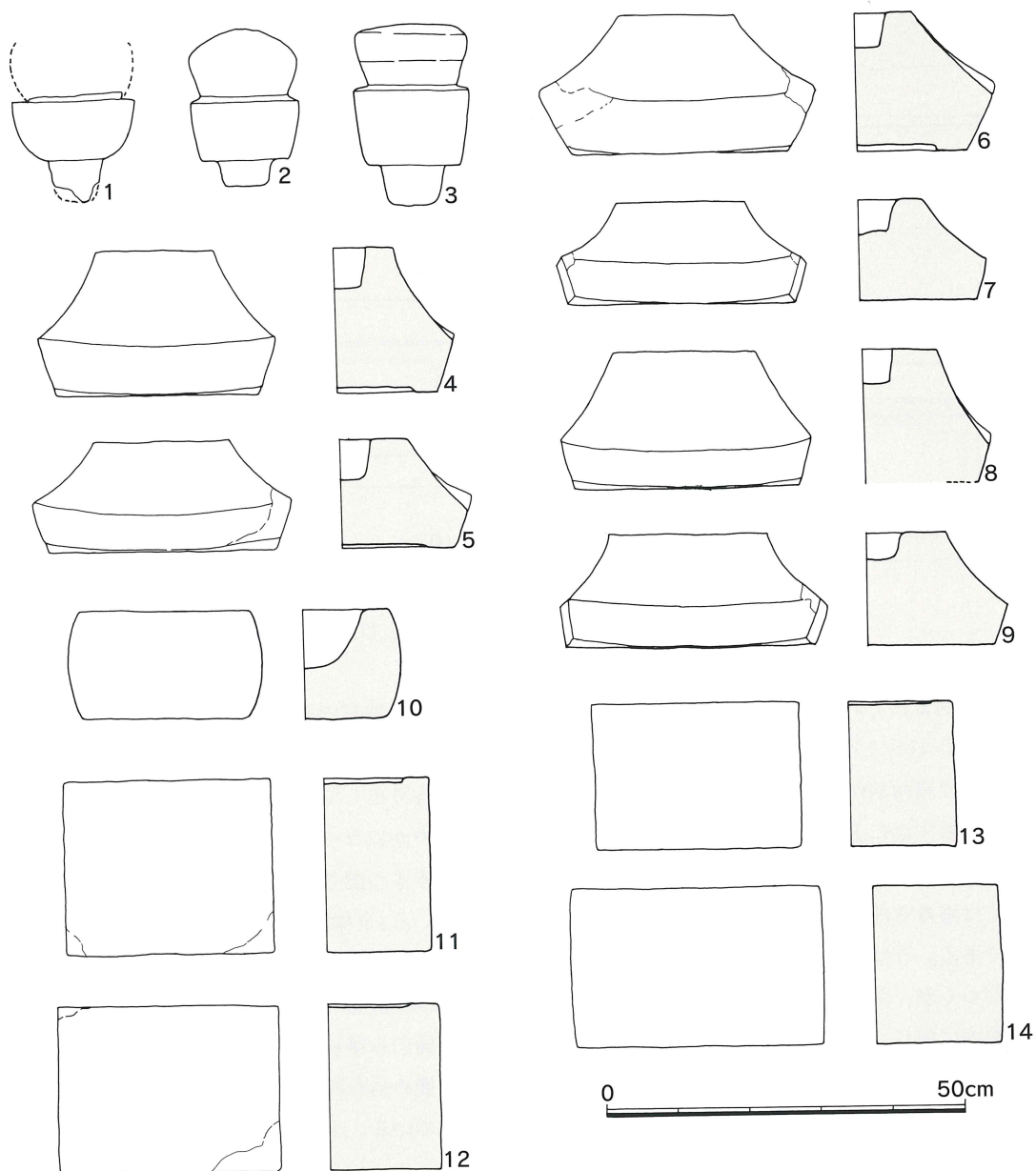
辺は緩やかにカーブさせている。下面には椀形を作り出している。塔身は前後面ともわずかに膨らませており、前面上半に2区の長方形の彫り沈め内に1体ずつの仏像を半肉彫りしている。向かって左は蓮華座上に定印阿弥陀如来の座像がみられ、向かって右は蓮華座上に同じく座像がみられるが、摩滅しており像様の限定はできない。この2体の仏像下に細い陰刻線により銘文が刻まれており、中央にやや大きめの金剛界四仏のウーン（阿閼）

タラク（宝生）・キリーク（弥陀）・アク（不空成就）の梵字種子が線刻されており、その両側に銘文がみられる。銘文は以下のとおりである。

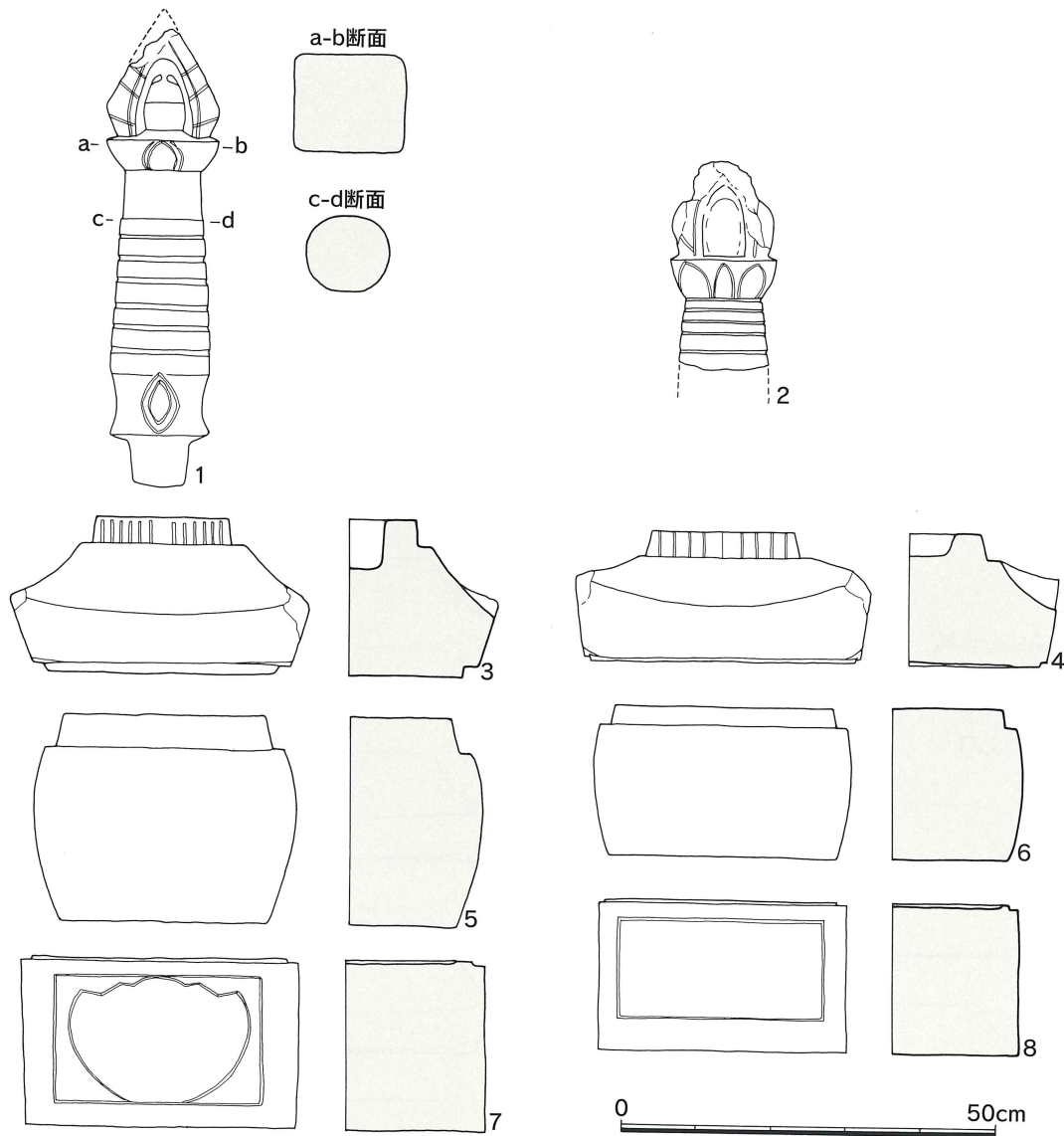
永造立石仏一本之建者
 當庵中興□□□公座元禪師
 ウーン・タラク・キリーク・アク
 七分全功徳主江月妙浦信女
 時永禄四年辛酉三月十五日 孝子敬白

基壇石は2段であり、上段中央に衲穴を彫り、塔身下の衲を嵌め込んでいた。

第363図は宝塔の部材である。1・2は相輪である。1は火炎宝珠下に請花があるが、各面に2重陰刻線の蓮弁を1弁ずつ配しているのみである。請花の断面形は隅丸方形であり、方柱石を彫成して相輪を製作したことが想定できる。宝珠下には七輪がみられるが、幅もまちまちであり、彫りも雑である。相輪最下部には菱形の2重陰刻線の蓮弁が各面に1弁ずつ合計4弁配されている。2は相輪上部の破片である。火炎宝珠請花は細線陰刻



第362図 庵の平遺跡石塔実測図② (1/10)



第363図 庵の平遺跡石塔実測図③ (1/10)

により8弁が刻まれているが、バランスも悪く稚拙である。3・4は笠部である。3の笠部軒の下辺は直線的に延び、軒端でわずかに上方にカーブさせており、上辺は全体を緩やかにカーブさせている。露盤には2区画の連子窓が退化した縦陰刻が6本ずつ配されている。下面には椀形を作り出している。4も笠部軒の下辺が直線的に延び、軒端でわずかに上方にカーブさせており、上辺は全体を緩やかにカーブさせている。露盤には中央に細線の縦線を刻み、その両側に2区画の連子窓が退化した縦陰刻が4本ずつ配されている。下面には椀形を作り出し、その下面には塔身首部を嵌め込む枿穴がわずかに彫り沈められている。全体的に横幅に比較して縦幅が薄い。5・6は塔身である。5は塔身最大径を中央よりやや上部にもち、首がつく。6も塔身最大径を中央よりやや上部にもち、首がつくが、全体的に横幅に比較して縦幅が薄い。7・8は基礎部である。7の各側面には細線陰刻による方形輪郭内に同じく細線陰刻による格狭間が刻まれている。正面のみ格狭間内に墨書がみられるが、判読不能である。上面には1段の段形がつくられており、上面には塔身を嵌め込む枿穴が穿たれている。8の側面には細線陰刻による方形輪郭内に同じく細線陰刻による格狭間が刻まれている。上面には1段の段形がつくられており、上面には塔身を嵌め込む枿穴が穿たれている。

第362図は五輪塔部材である。1・2・3は空風輪である。1の風輪部は丸く上方に延びることに対し、2・

3は直線的に開きながら延びている。空輪部も同様に直線的に開きながら上方に延び、上面を丸く仕上げている。4～9は水輪部である。いずれも軒がわずかに反り、7・9は軒の中央付近を膨らませている。10は水輪部であり、上半中央をくぼませている。11～14は地輪部であり、11・12・13の上面は水輪部を納める枿穴が浅く彫られている。

第3節 まとめ

庵の平遺跡は豊後大野市指定有形文化財の笠塔婆をはじめ、宝塔2基、五輪塔6基以上からなる石造物群であったことがわかる。

笠塔婆は銘文から永禄4年(1561)に造立され、「當庵中興」・「座元禪師」とあることから、付近に庵寺があり、その寺住の禅宗僧夫婦の供養塔であることがわかる。また、銘文中には「七分全功德」とあり、これは一切の聖事は七分であるとする『地藏菩薩本願經』の内容を受けた『灌頂隨願往生方淨土經』の「七分全得」に通じる。「七分全得」とは死者の眷属等が死者のために供養を営んでも、その福利の7分の6は供養した人が受け、死者の受ける福利は7分の1にすぎないとされ、生前に自分の死後菩提のために逆修供養の法要を行えば、死後の福利をすべて得られるとする考え方である(服部清道1933)。同様に「七分全得」銘が確認できる資料は、貞和6年(1350)銘をもつ大分市木の上少林寺板碑や天授3年(1377)銘竹田市坪平宝塔をはじめ、戦国期の石造物に多くみられるとされている(望月友善1975)。豊後大野市千歳町内では、天文3年(1534)銘をもつ鹿合田笠塔婆(千歳町柴山所在)にも「奉刻彫石塔一基 七分全功德主 寶信叟公記靈禪師(後略)」とみられる(千歳村誌刊行会1974)。

中央に金剛界四仏の梵字種子を挟み、向かって右側に「當庵中興……座元禪師」とあり、向かって左側に「七分全功德主江月妙浦信女」と女性の戒名がみえることから、この笠塔婆は夫婦の供養塔であり、婦人は生前の逆修供養であったことが想定できる。塔身上方に阿弥陀如来ともう一体の仏像が刻まれていることは、それぞれの仏がこの2人の死者に関連する仏であったことが想定できよう。

このように塔身に仏菩薩を半肉彫りし、その下方に銘文を刻む笠塔婆が、豊後大野市千歳町に特徴的に分布する。前述した鹿合田笠塔婆のほかに、天文10年(1541)銘をもつ桐生笠塔婆(千歳町柴山所在)、永禄3年(1560)銘をもつ干草場笠塔婆(千歳町新殿所在)、永禄6年(1563)銘をもつ峯笠塔婆(千歳町柴山所在)、永禄10年(1567)銘をもつ治康庵笠塔婆(千歳町大迫所在)などがみられ、このほかにも大迫石仏横笠塔婆(千歳町大迫所在)をはじめ銘文が確認できない笠塔婆も確認されている。それぞれの銘文から、これらは禅宗関係の僧侶の供養塔として造立されたものが多く、現在に残されていないにかかわらず、それぞれの笠塔婆付近に庵寺が存在していたことが想定できる。笠塔婆の調整法や銘文の類似性から同一の石大工の手によるものと考えられ、紀年銘が天文3年(1534)から永禄10年(1567)まで34年間にわたり笠塔婆が造作されていることがわかる。また、その分布も旧千歳村域の狭い範囲に限定できるため、16世紀中葉の石大工の様相がうかがい知れる良好な資料になりえる。

笠塔婆のほかに確認できた宝塔は2基に限定でき、笠塔婆にあらわれる夫婦の墓塔であるかもしれない。宝塔笠部の特徴から笠塔婆と近接する16世紀中葉の所産であることがわかり、このほかの五輪塔群も戦国期におさまるものである。

この石造物群の上方畑地内には小堂が現在も存在し、ここにも戦国期の石塔がみられるほか、近世の石造物も存在する。笠塔婆にみられる「當庵」はこの小堂の前身にあたるものかもしれない。

引用文献

- 服部清道 1933『板碑概説』鳳鳴書院
望月友善 1975『大分の石造美術』木耳社
千歳村誌刊行会 1974『千歳村誌』

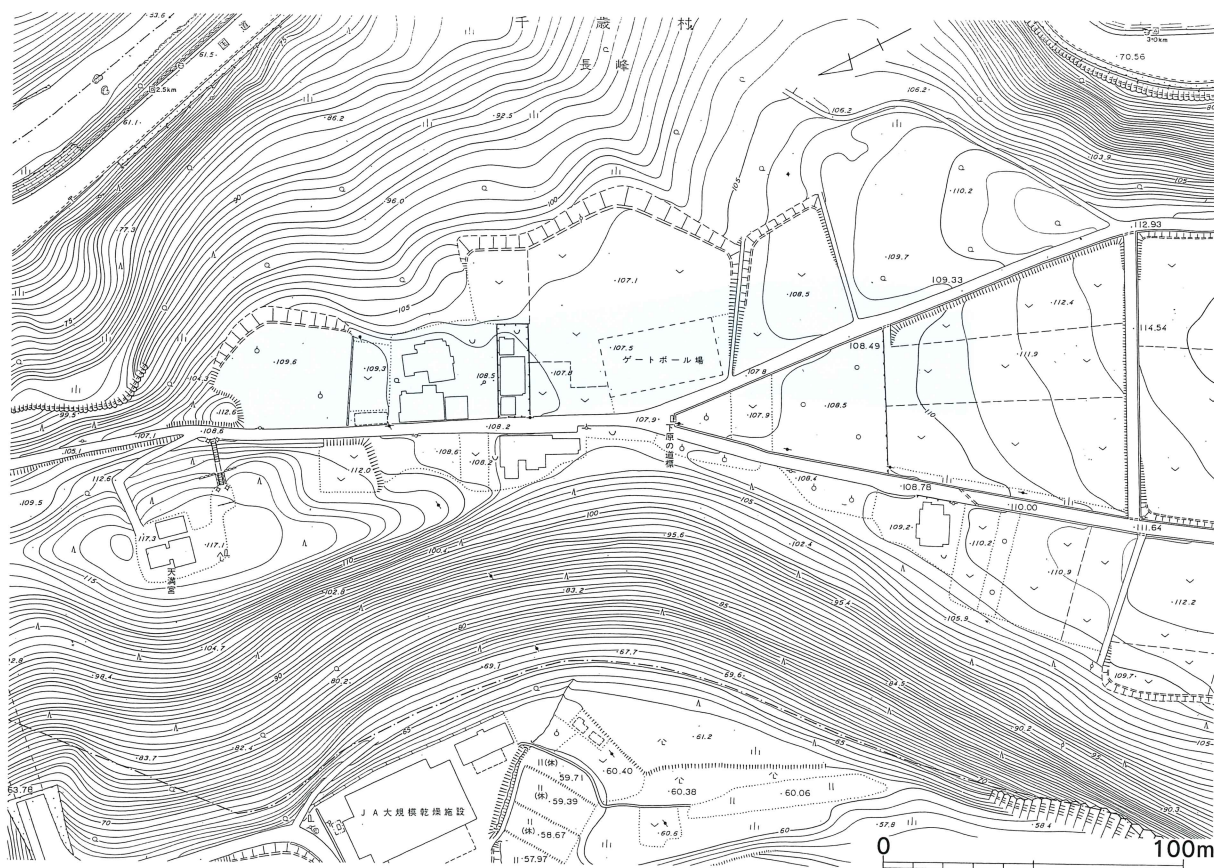
第5章 下ノ原遺跡の調査

第1節 調査の概要

下ノ原遺跡は大分県豊後大野市千歳町長峰（旧大野郡千歳村大字長峰）に所在し、大野川の支流である茜川の北に広がる高添台地の北東端にあたる。遺跡は幅50～100mのやせ尾根上の平坦地に広がる。遺跡の南側の丘陵上には下ノ原地区の鎮守となる天満宮が存在し、その下には近世以降の街道に沿って屋敷が並んでいる。街道沿いには豊後大野市の有形文化財に指定されている近世の下ノ原の道標が立てられている。現在、国道57号線は、茜川の谷部に沿って走っているが、国道57号線建設以前には高添台地上に街道が走っており、熊本市から大分市へ抜ける主要道路としてにぎわっていたと伝えられている。下ノ原遺跡よりやや大分市よりの地点からは、犬飼方面及び三重方面に分岐する道路が取り付き、交通の要衝であった地域である。

発掘調査は、平成14年9月および平成17年1月に2回に分けて行った。その結果、調査区の西側部分では自然地形として谷状地形が走り、この谷に客土を行い、畑地を造作していたことが確認できた。また、東側部分では、地山の削平が著しく、この削平面に近世以前の遺構は確認できなかった。そのため、削平を受けていないであろう天満宮の丘陵上から延びる丘陵斜面を削平して、生活空間を確保し、その廃土を谷部に埋めて耕作地を広げたことが推測できる。遺構が確認できないことから、この造作は古いものとはいえず、古くさかのぼっても近世のものであることが推測できる。

出土遺物は近世陶磁器ほか、土器類がわずかに出土したが、図化しえるものではない。



第364図 下ノ原遺跡調査区位置図 (1/2,500)

第6章 古城・五郎丸遺跡の調査

第1節 調査の概要

古城・五郎丸遺跡は大分県豊後大野市千歳町石田（旧大野郡千歳村大字石田）に所在する。大野川の支流である茜川の北に広がる丘陵の縁辺にあたり、現在は丘陵斜面に削平段を連続させ、集落を形成している。遺跡は標高130mの尾根上に広がるが、かねてより城跡としての伝承をもち、北には千歳町の盆地を望む視界の開けた場所であった。盆地の南西700~800mの地点には同じく平野縁辺に16世紀の館城である上門手遺跡が存在し、戦国期、盆地を取り囲む位置の丘陵上に城館が存在することがわかる。また、遺跡から丘陵を少し降りた地点に豊後大野市有形文化財に指定されている五郎丸板碑が存在する。五郎丸板碑は明応2年（1493）銘をもつ逆修を祈念した板碑であり、この周辺に同時期の生活空間が存在していたことは、推測するに難くはなかった。このほかにも遺跡周辺に戦国期の五輪塔が確認できる。

古城・五郎丸遺跡では、調査前から削平段が存在し、いつの時代か造作が行われたことがわかるが、城館遺跡に結びつく遺構・遺物は確認できず、また、削平段が造作された時期も明確にはできなかった。確認調査では土坑や柱穴2基を確認して掘り下げたが遺物は出土しなかった。また、調査区内に五輪塔地輪2基とキリシタン墓と伝えられている石造物が存在していた。

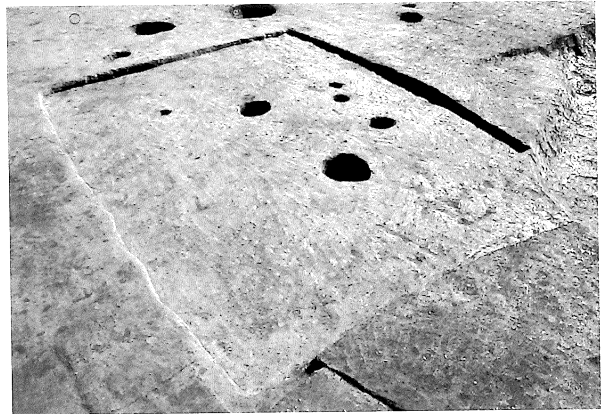


第365図 古城・五郎丸遺跡調査区位置図 (1/2, 500)

写真図版



1号竪穴 (南から)



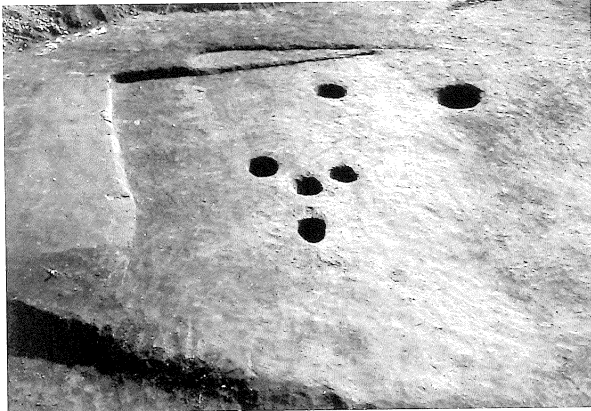
2号竪穴 (西から)



3号竪穴 (北西から)



4号竪穴 (北東から)



5号竪穴 (北から)



6号竪穴 (北から)



7号竪穴 (南から)



1・2号溝 (北から)

写真図版2 (高添遺跡出口地区3次調査区)



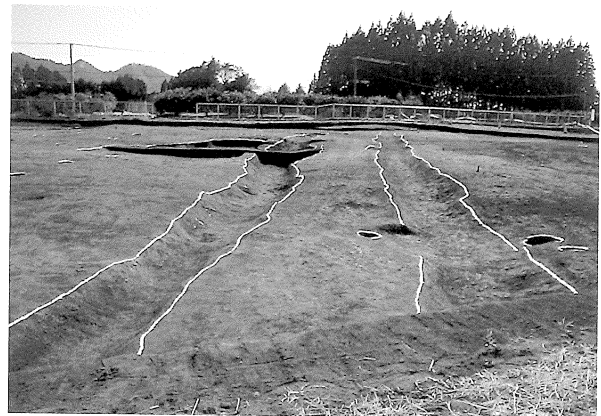
2号溝瓦質擂鉢出土状態



1・2号大型土坑 (北東から)



2号大型土坑



3号溝・1号道路 (北から)



4号溝 (東から)



4号溝堆積状態 (東から)

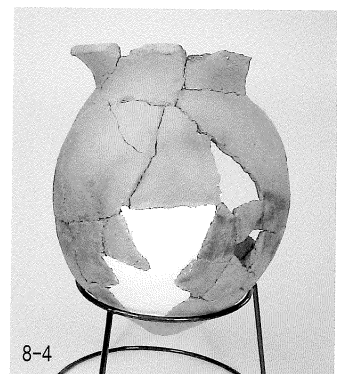


6-1



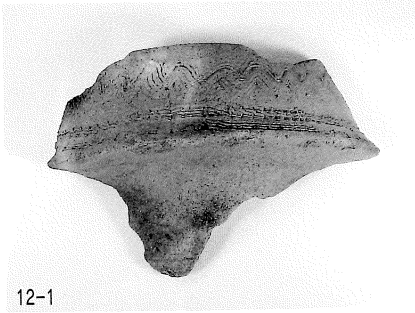
6-2

1号竪穴出土遺物 (第6図参照)



8-4

2号竪穴出土遺物 (第8図参照)



12-1

4号竪穴出土遺物 (第12図参照)

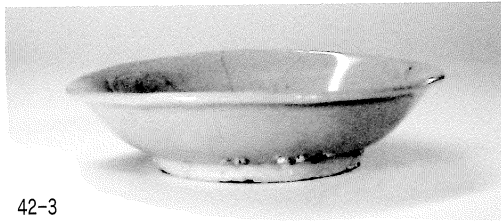


14-1

6号竪穴出土遺物 (第14図参照)



42-2



42-3



42-6



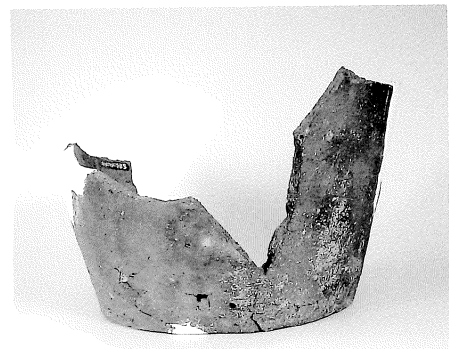
42-8



42-6



43-1



43-2

2号溝出土遺物 (第42~43図参照)

写真図版4 (高添遺跡石五道原地区)



1号竪穴 (東から)



2号竪穴 (東から)



3号竪穴 (東から)



4号竪穴 (東から)



6号竪穴 (東から)



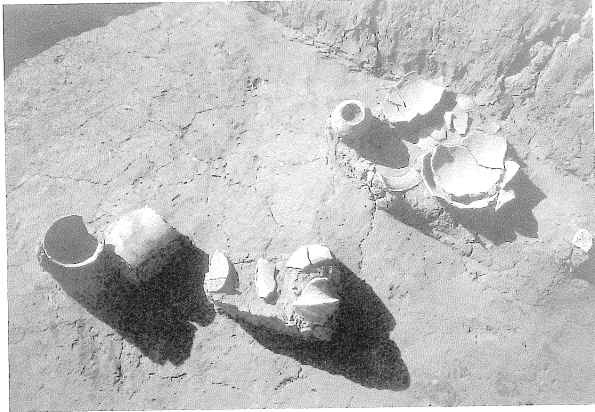
7号・18号竪穴 (東から)



8号竪穴 (東から)



9号竪穴 (東から)



9号竪穴遺物出土状態 (東から)



10号竪穴 (東から)



11号竪穴 (東から)



12号竪穴 (東から)



13号竪穴 (東から)



14号竪穴 (東から)



15号竪穴 (東から)



16号竪穴 (東から)

写真図版6 (高添遺跡石五道原地区)



17号竪穴 (東から)



18号竪穴 (東から)



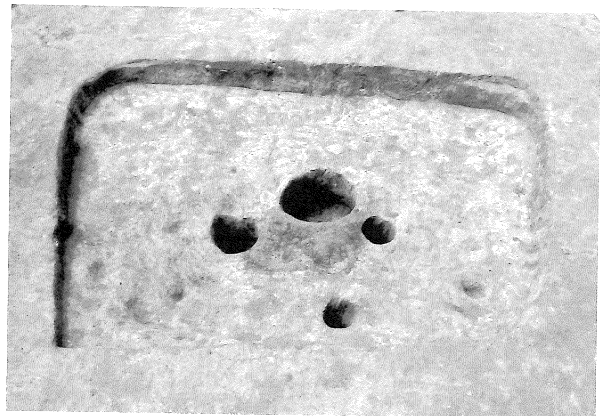
18号竪穴遺物出土状態 (西から)



19号竪穴 (東から)



20号竪穴 (東から)



23号竪穴 (東から)



1号掘立柱建物 (東から)



2号掘立柱建物 (東から)



1号・2号掘立柱建物(東から)



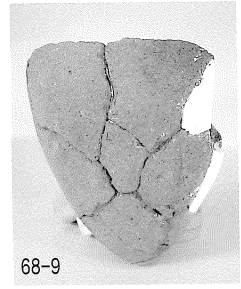
3・4・5号掘立柱建物(東から)



1号溝(道路状遺構)検出状態

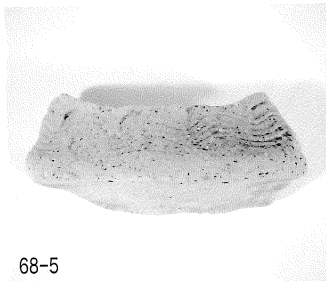


68-7

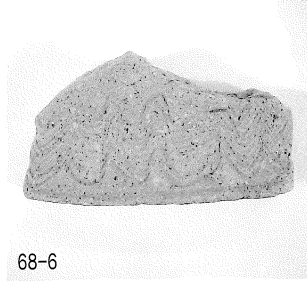


68-9

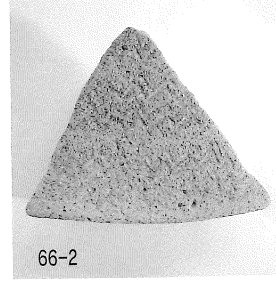
1号竪穴出土遺物(第66図参照)



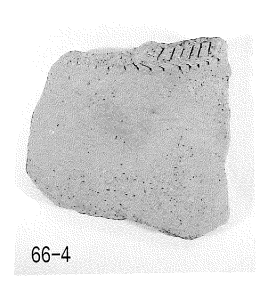
68-5



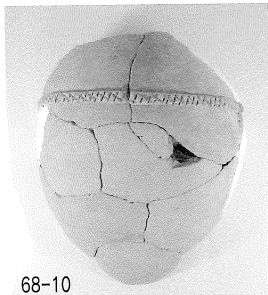
68-6



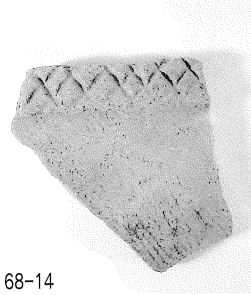
66-2



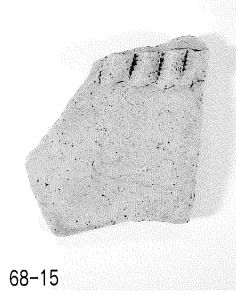
66-4



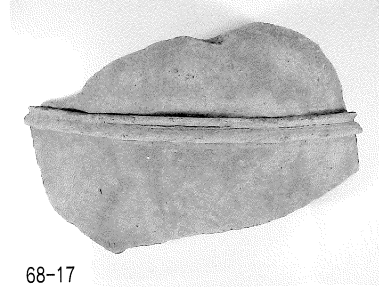
68-10



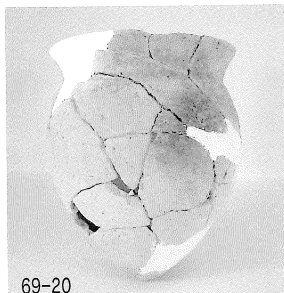
68-14



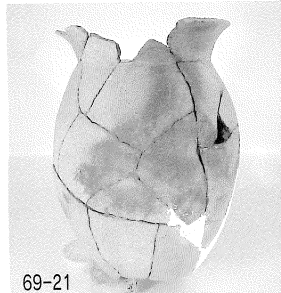
68-15



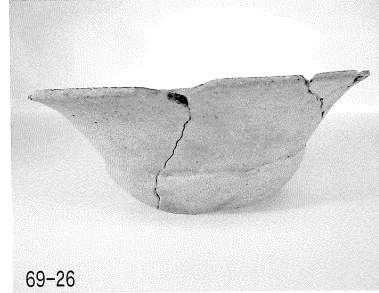
68-17



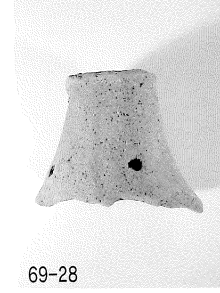
69-20



69-21



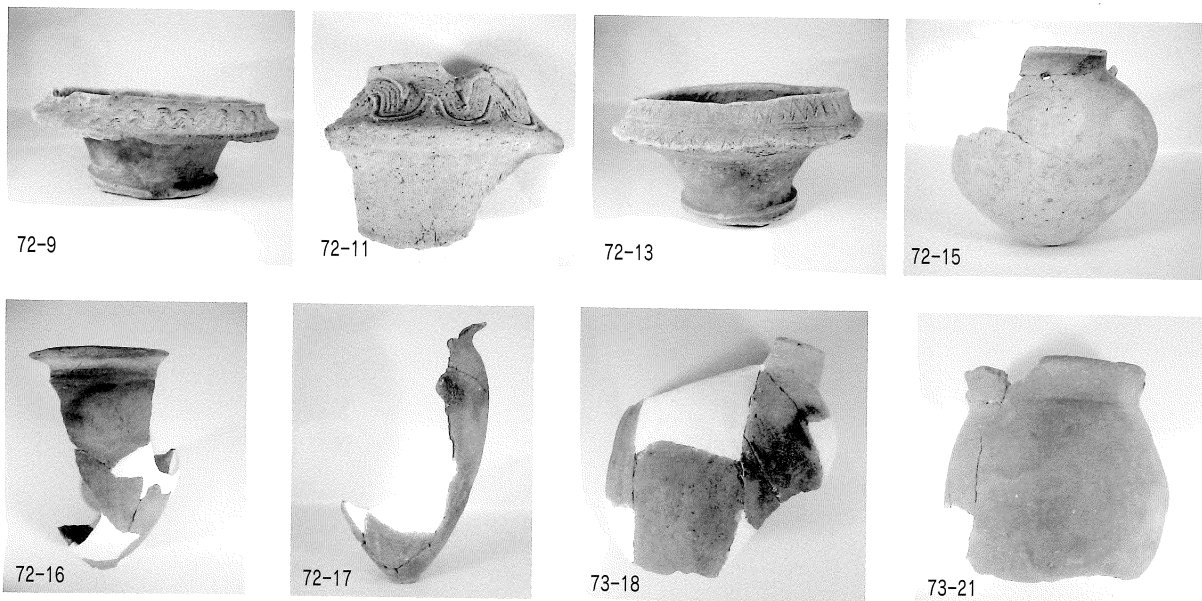
69-26



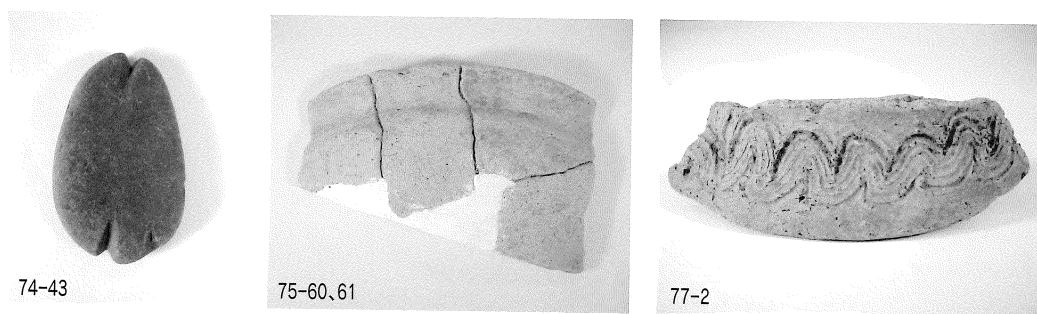
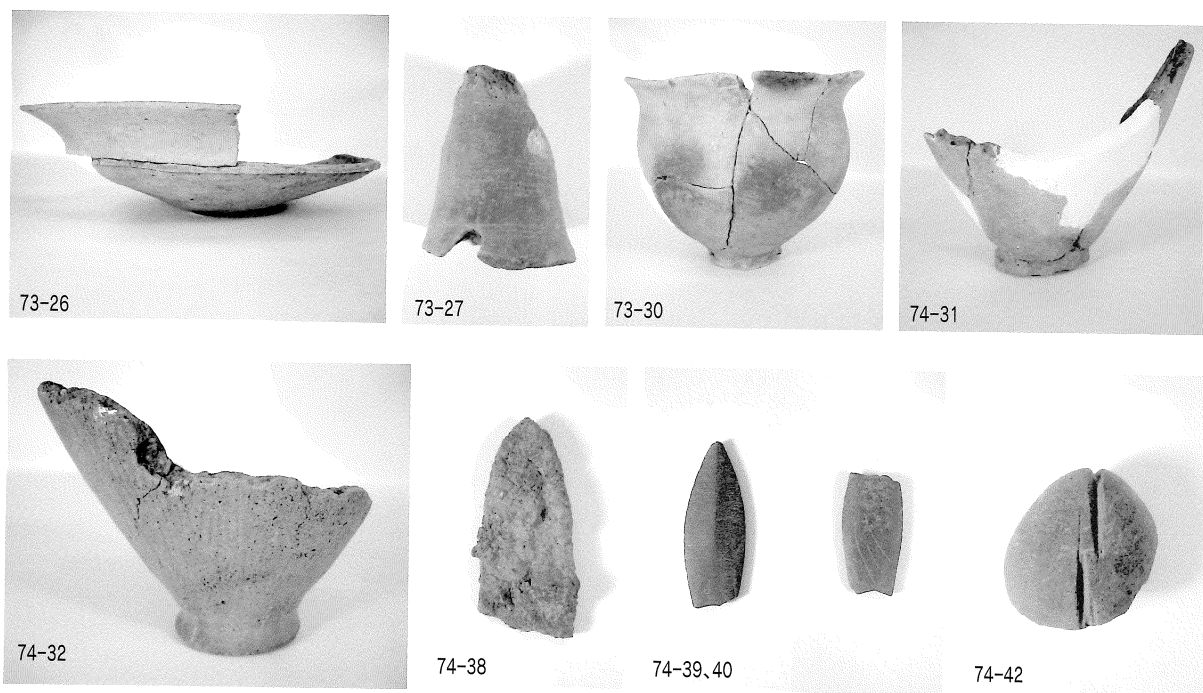
69-28

1・2号竪穴出土遺物(第66・68・69図参照)

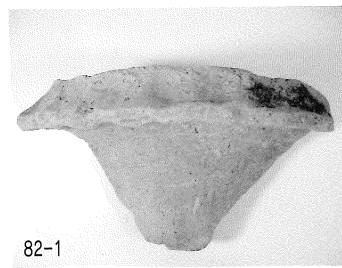
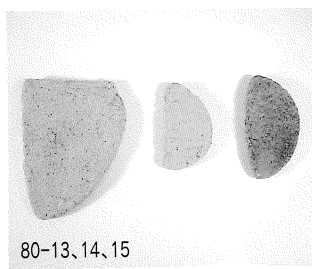
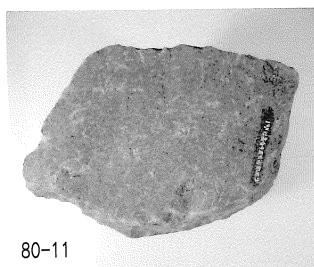
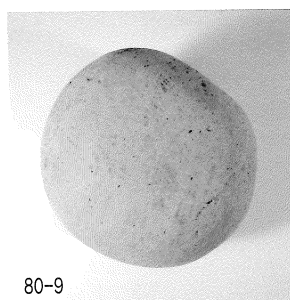
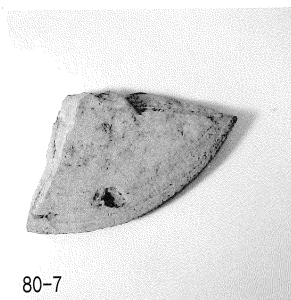
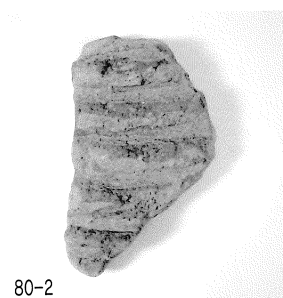
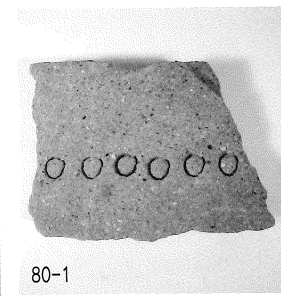
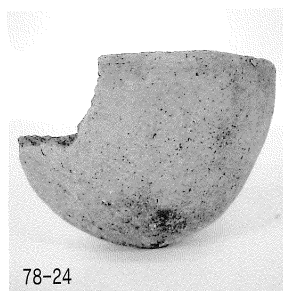
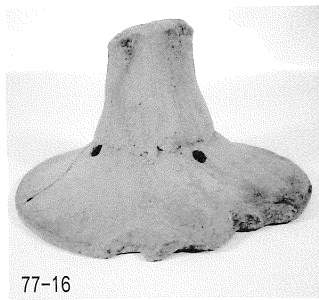
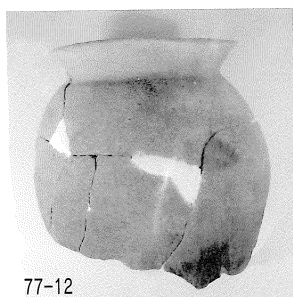
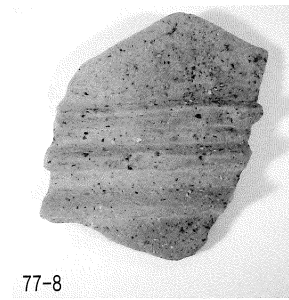
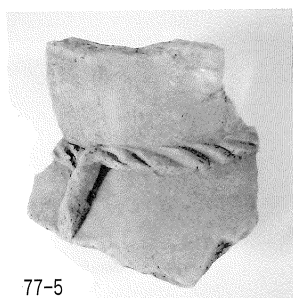
写真图版8 (高添遺跡石五道原地区)



3号竖穴出土遺物 (第72・73図参照)

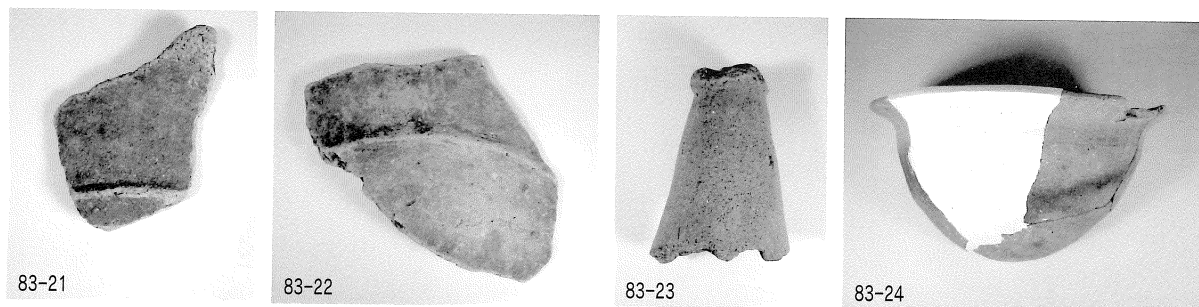
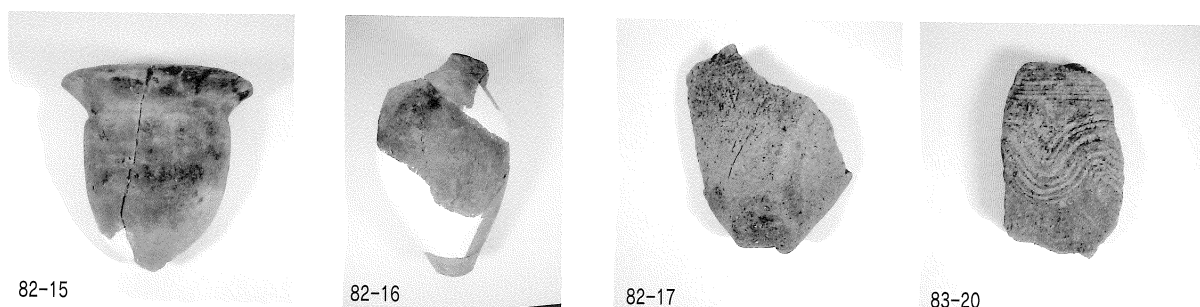
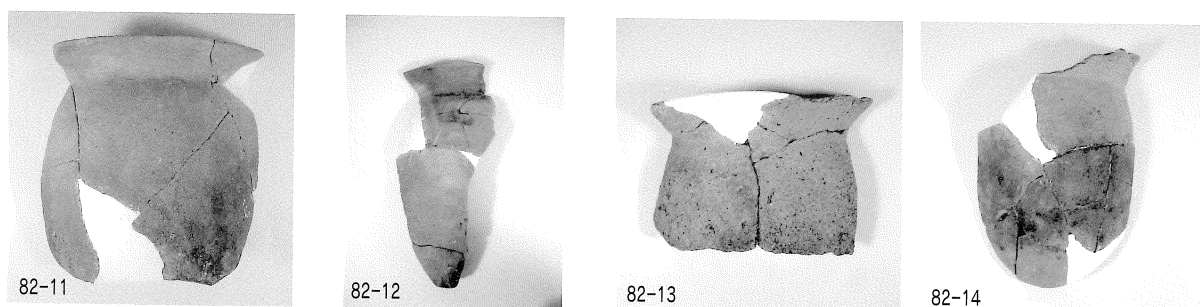
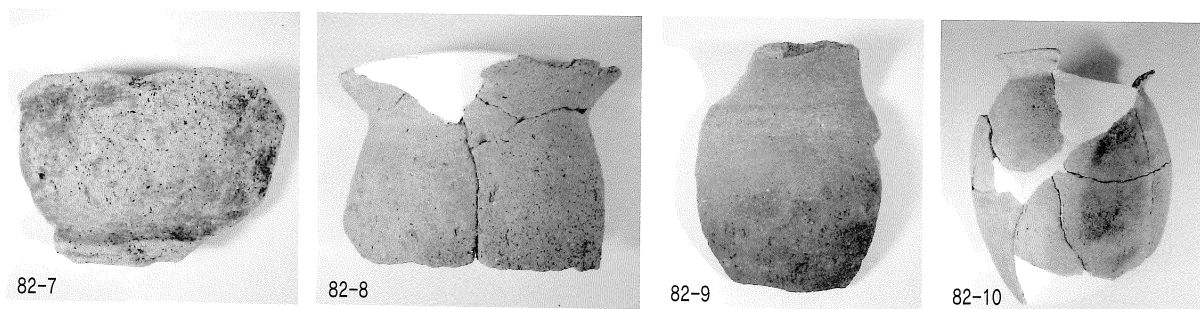
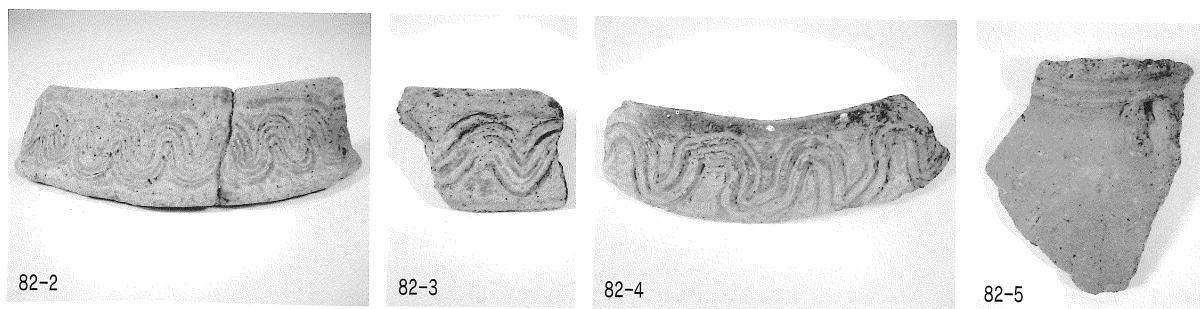


3・4号竖穴出土遺物 (第73・74・75・77図参照)

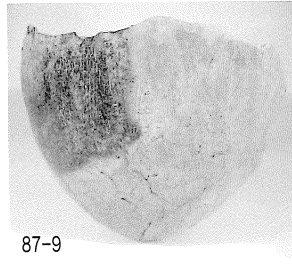
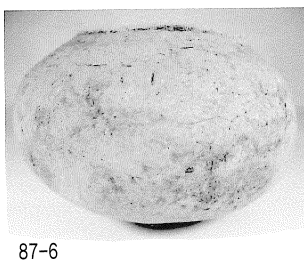
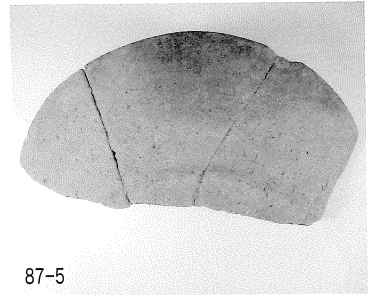
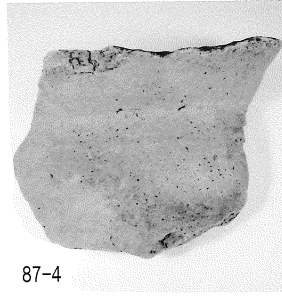
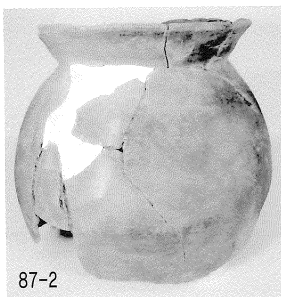
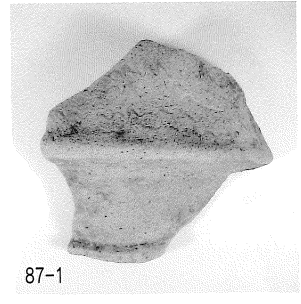
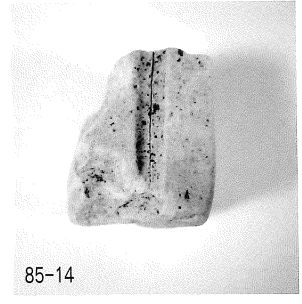
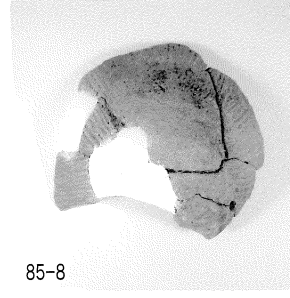
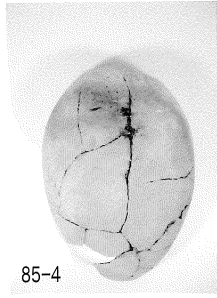
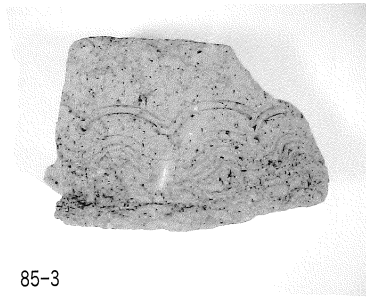
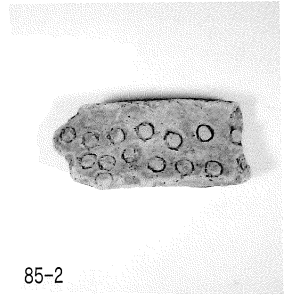
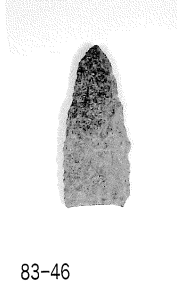


4・6・7号竖穴出土遺物 (第77・78・80・81・82図参照)

写真图版10 (高添遺跡石五道原地区)



7号竖穴出土遺物 (第82・83図参照)

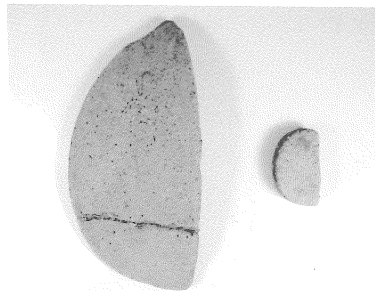


7・8・9号竪穴出土遺物 (第83・85・87図参照)

写真图版12 (高添遺跡石五道原地区)



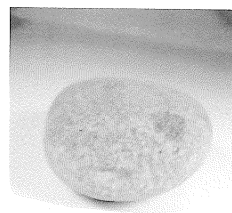
87-12



87-13, 14



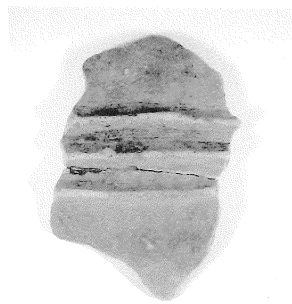
89-1



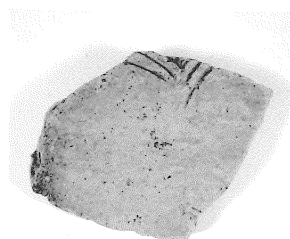
89-3



89-4



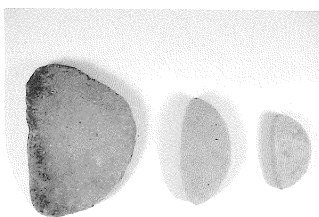
91-1



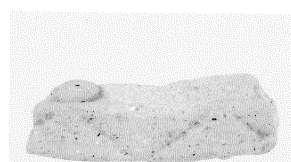
91-2



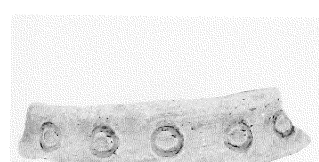
91-5



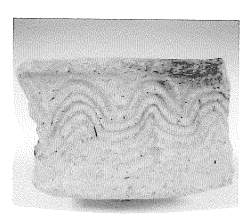
91-6, 9, 10



93-1



93-2



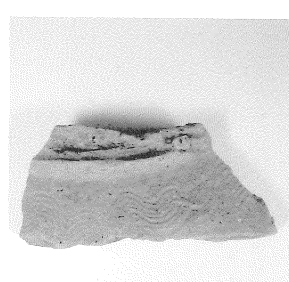
93-3



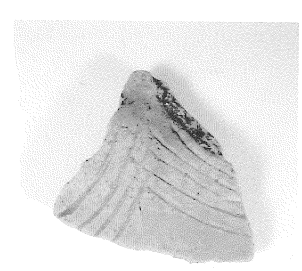
93-4



93-5



93-6



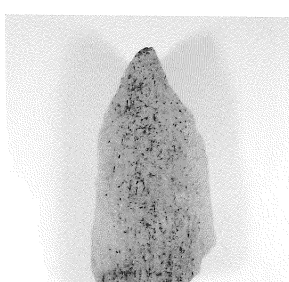
93-7



93-8

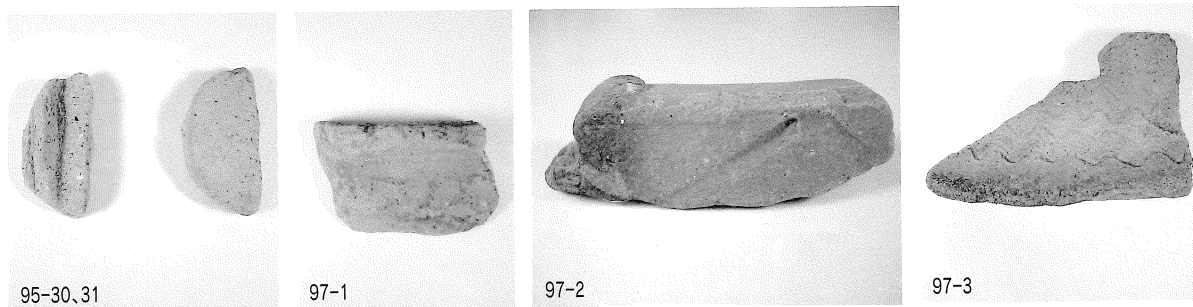
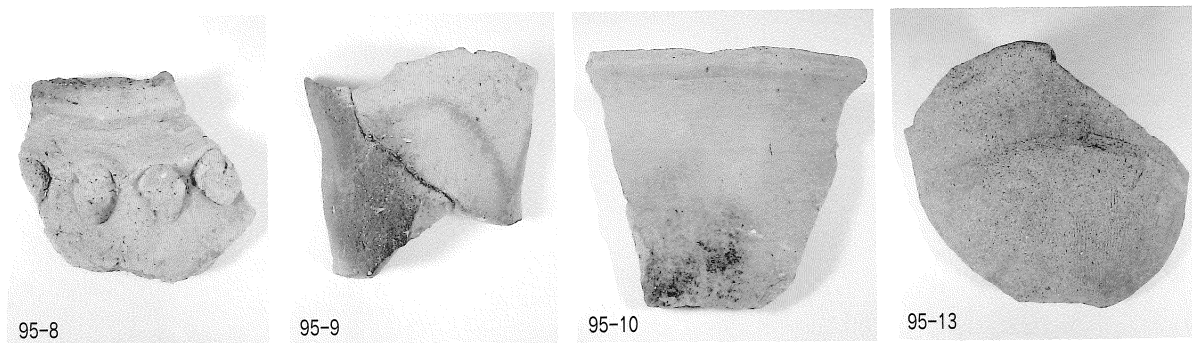
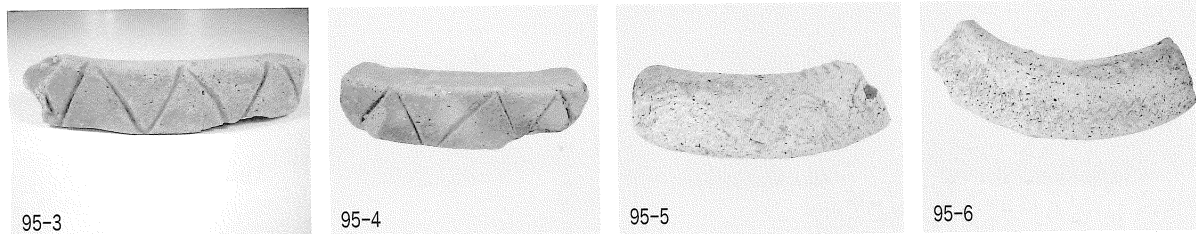
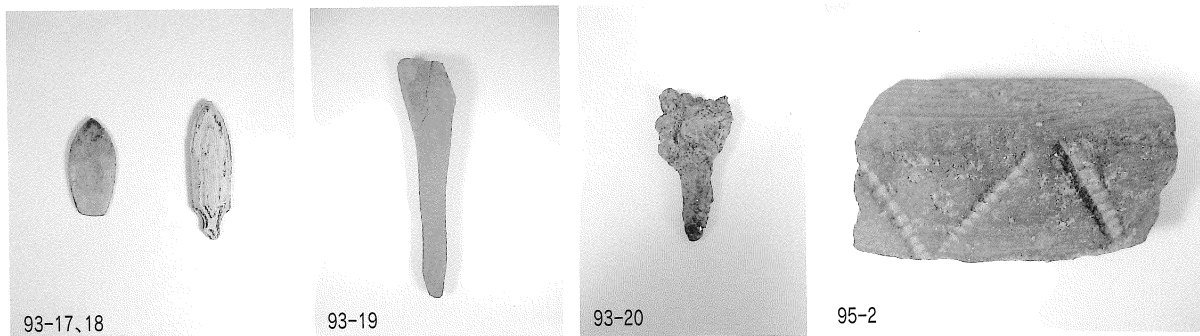


93-10



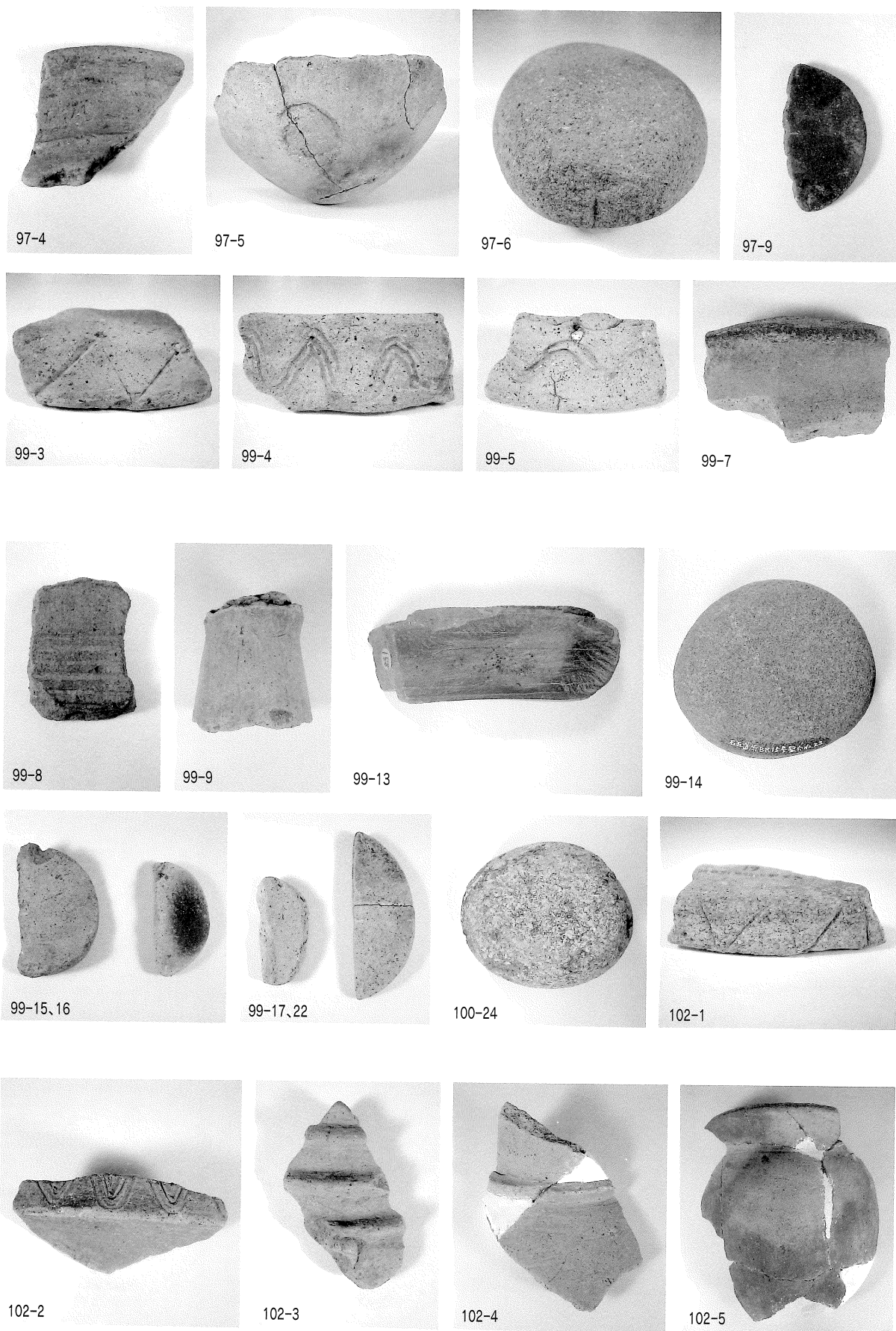
93-11

9・10・11・12号竖穴出土遺物 (第87・89・91・93图参照)

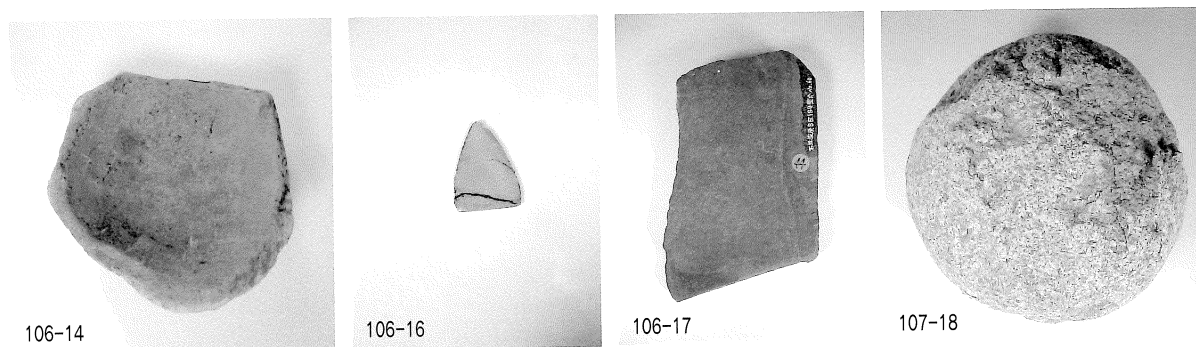
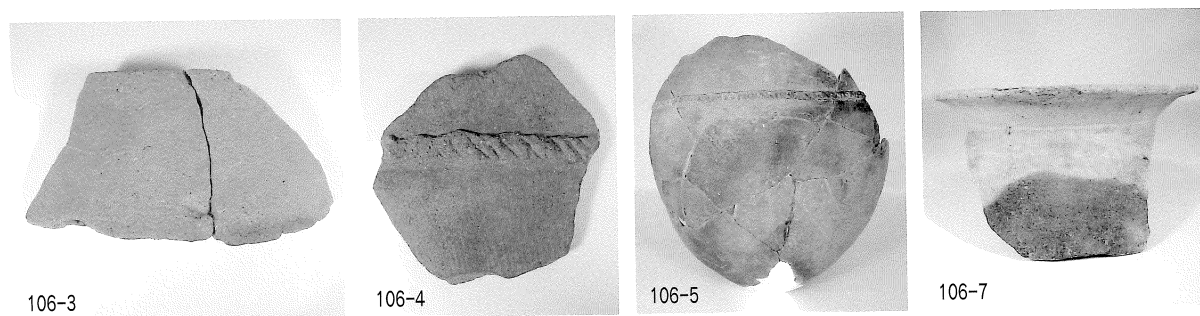
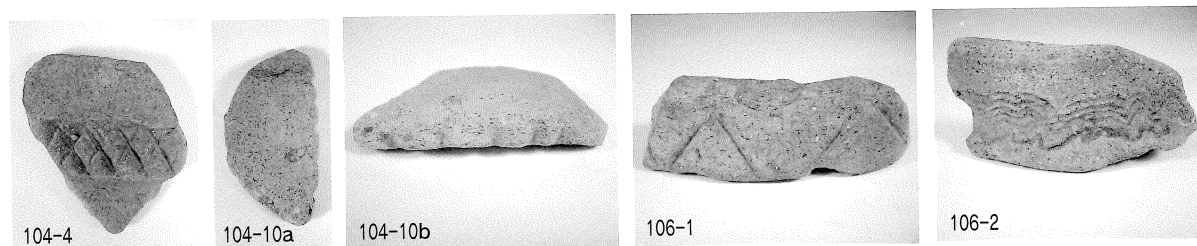
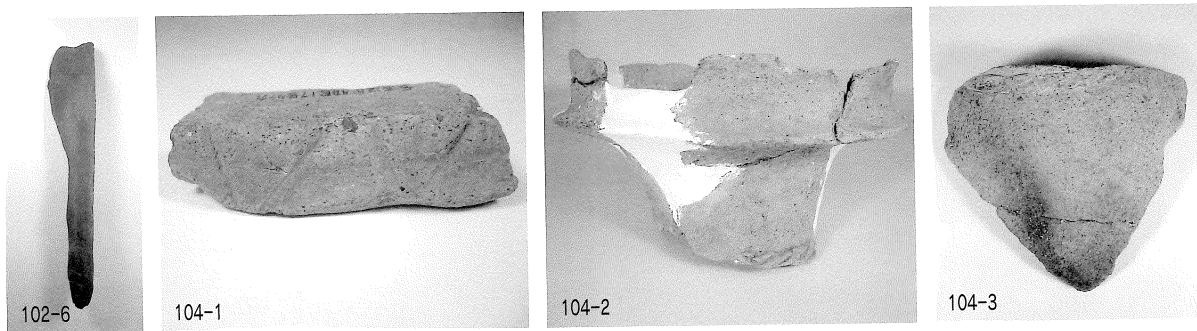


12・13・14号竖穴出土遺物 (第93・95・97図参照)

写真图版14 (高添遺跡石五道原地区)

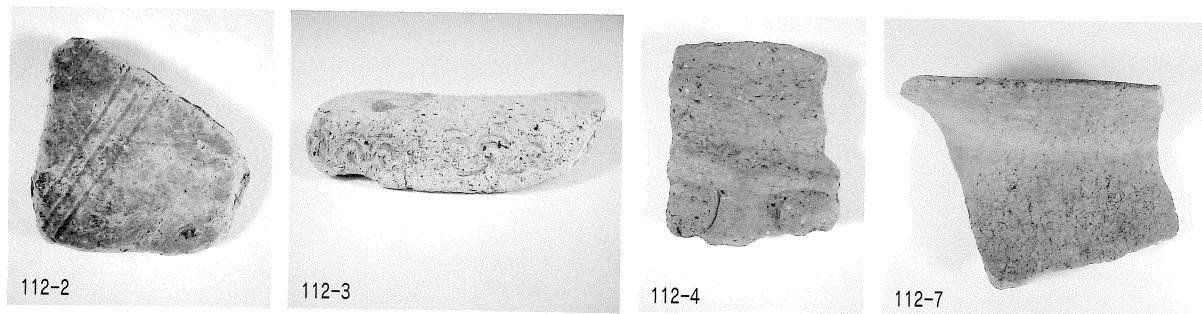
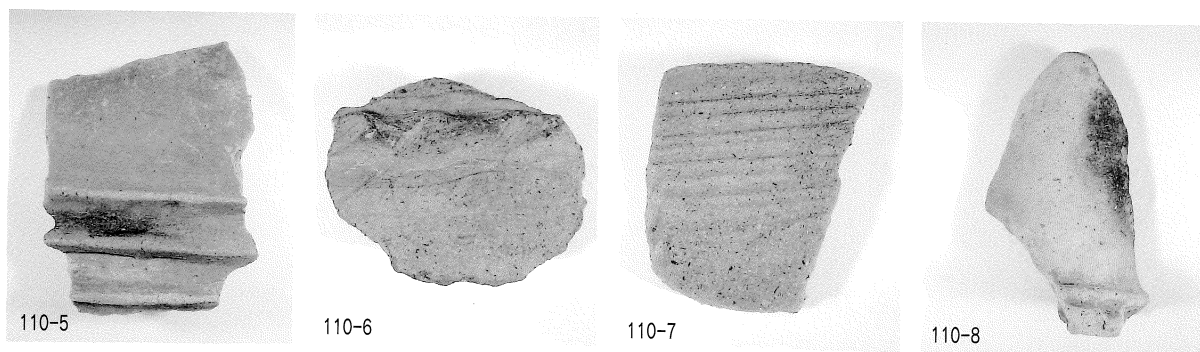
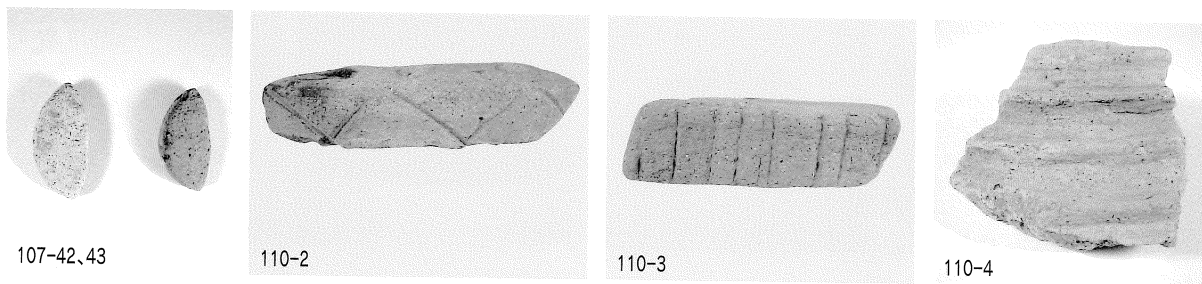
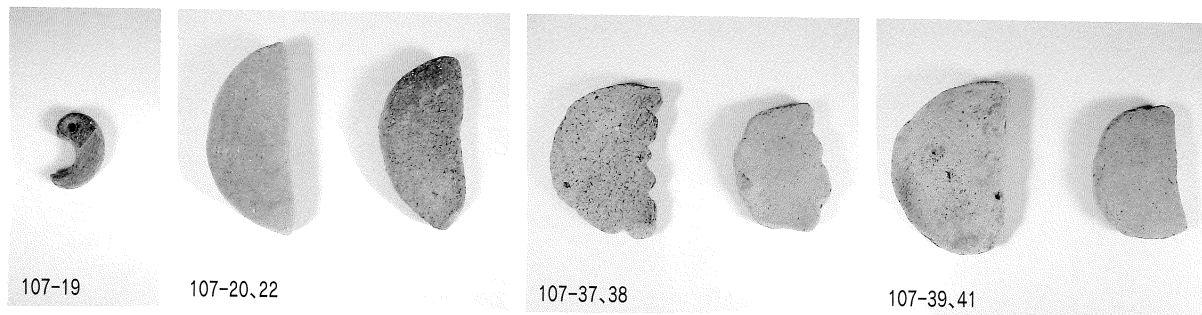


14・15・16号竖穴出土遺物 (第97・99・100・102図参照)

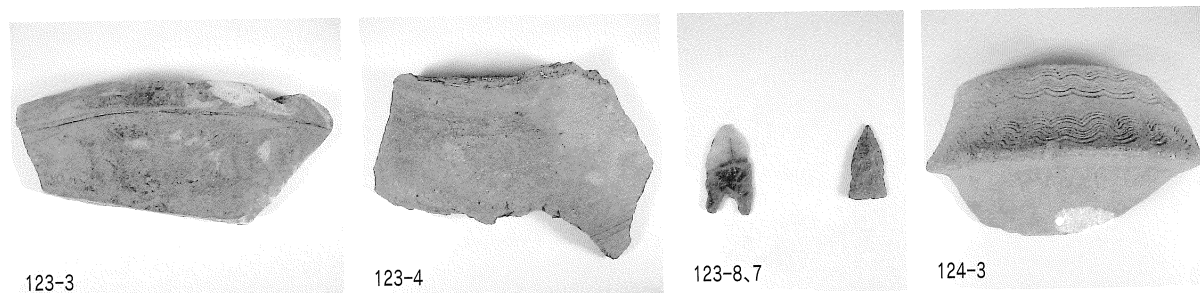
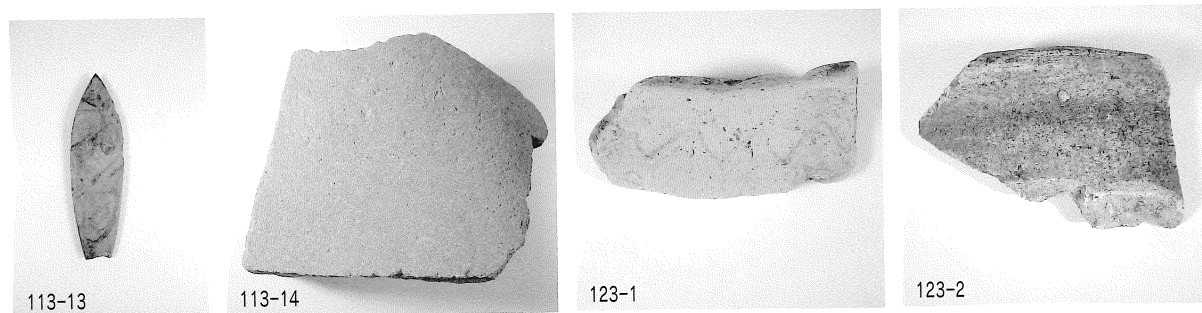
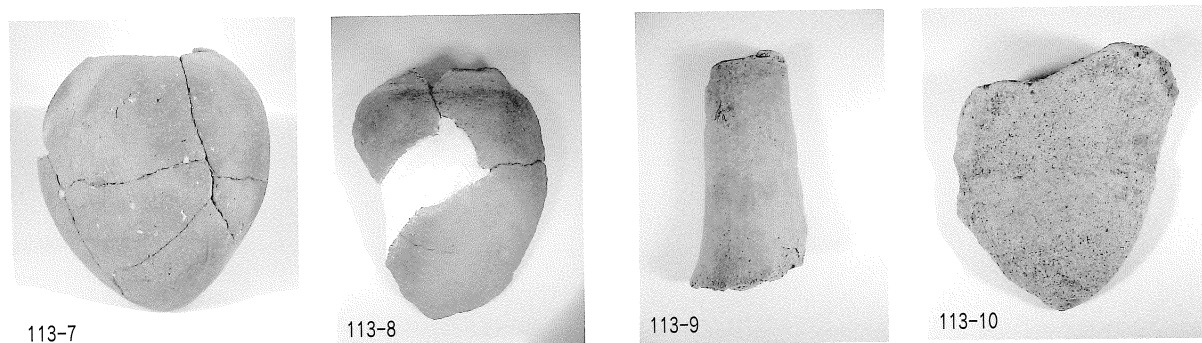
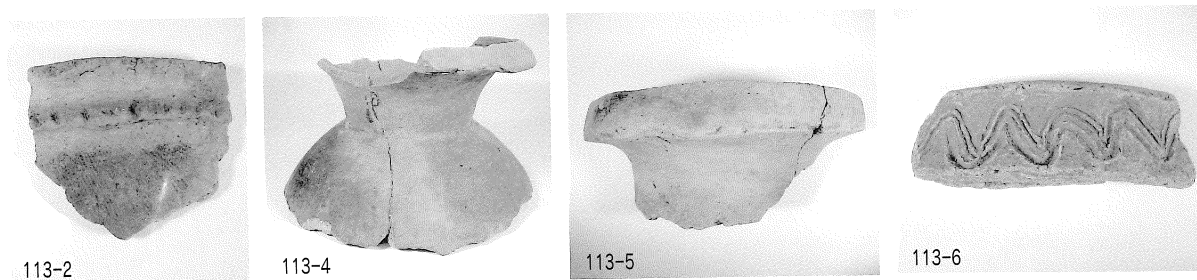
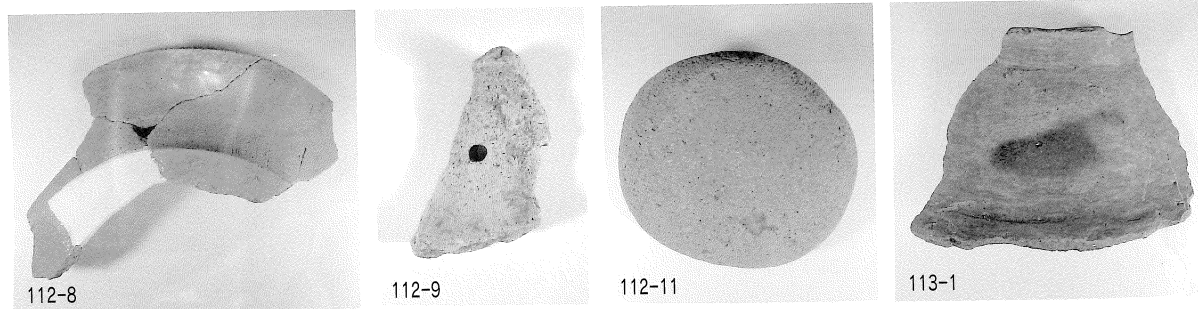


16・17・18号竖穴出土遺物 (第102・104・106・107图参照)

写真图版16 (高添遺跡石五道原地区)

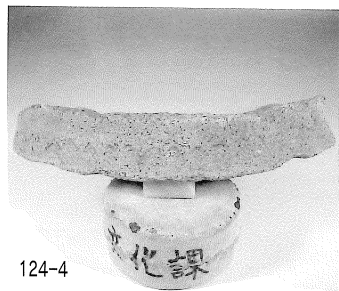


18・19・20・21号竖穴出土遺物 (第107・110・112図参照)

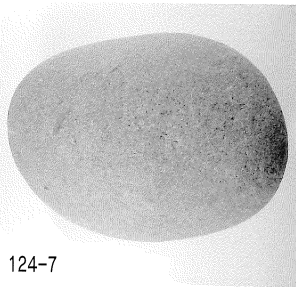


21・22号竪穴・1号溝・柱穴(ピット)出土遺物(第112・113・123・124図参照)

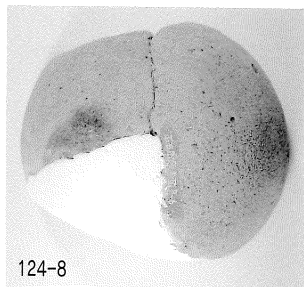
写真図版18 (高添遺跡石五道原地区)



124-4



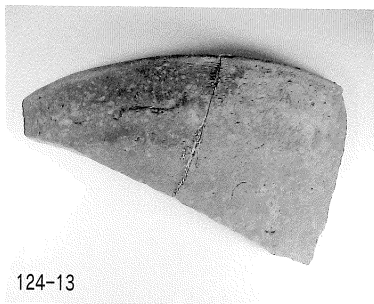
124-7



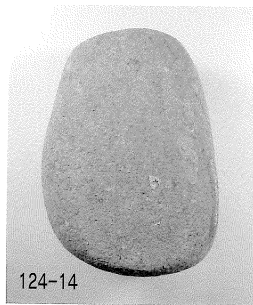
124-8



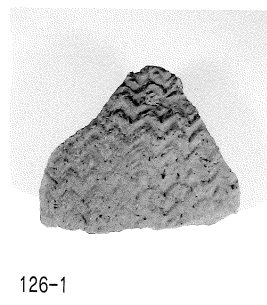
124-12



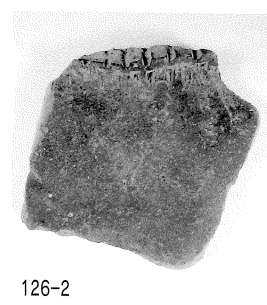
124-13



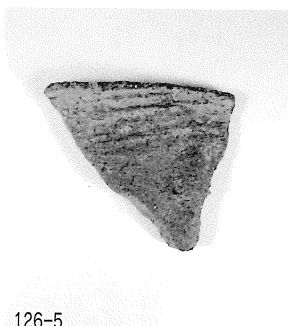
124-14



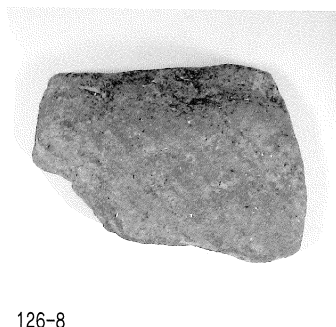
126-1



126-2



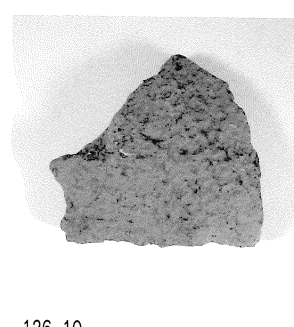
126-5



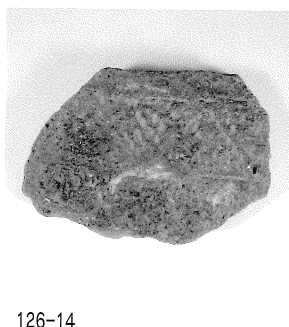
126-8



126-9



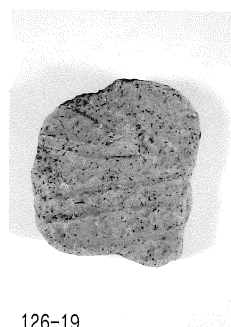
126-10



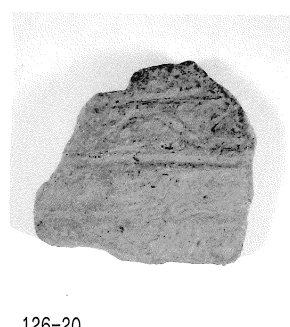
126-14



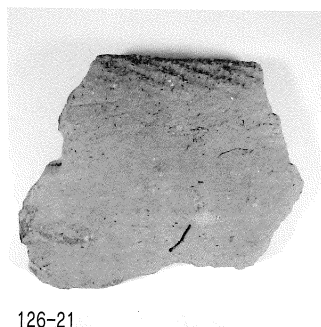
126-18



126-19



126-20



126-21



127-28

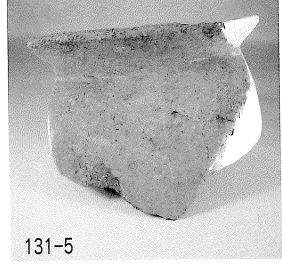
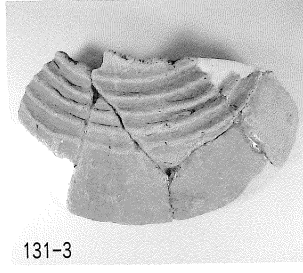
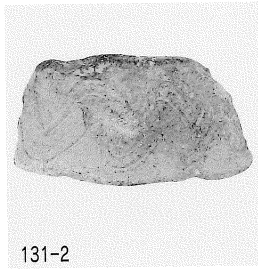
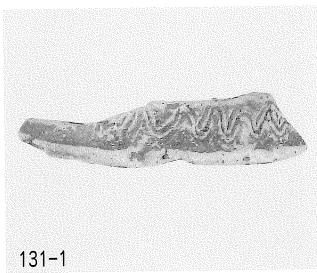
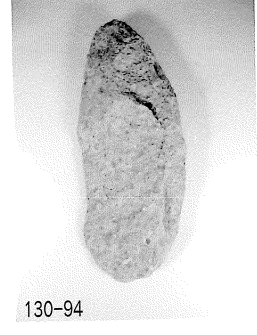
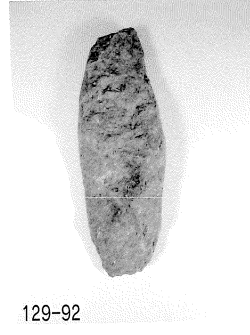
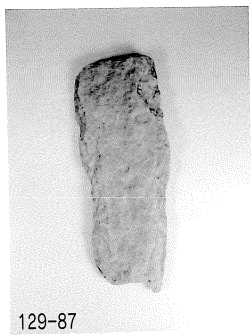
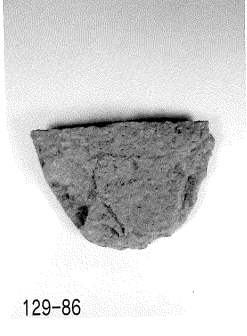
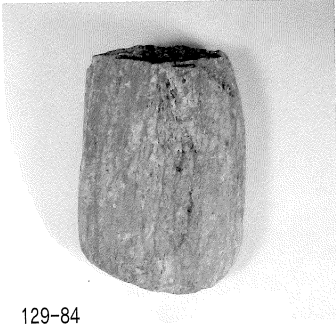
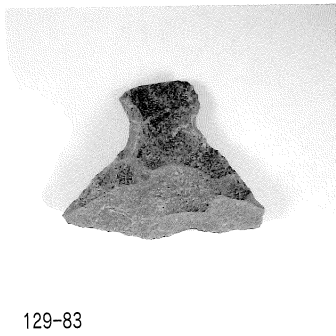
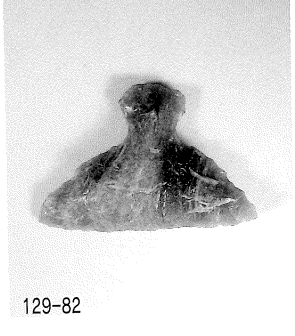
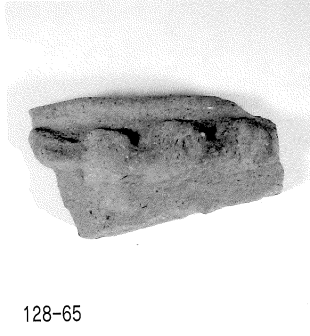
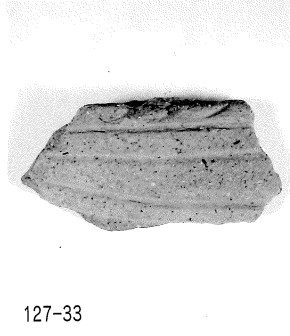
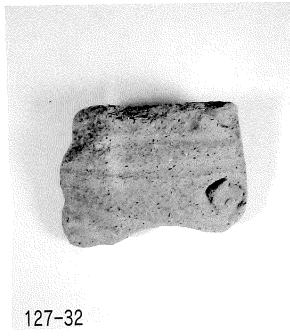


127-30



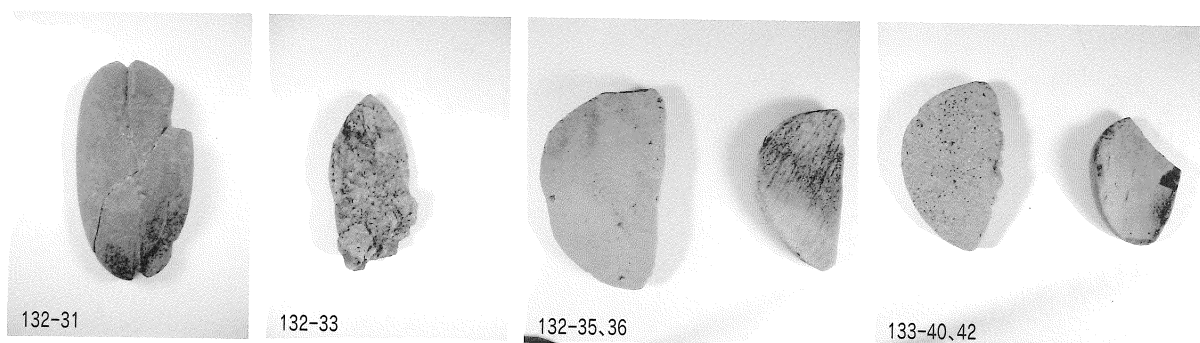
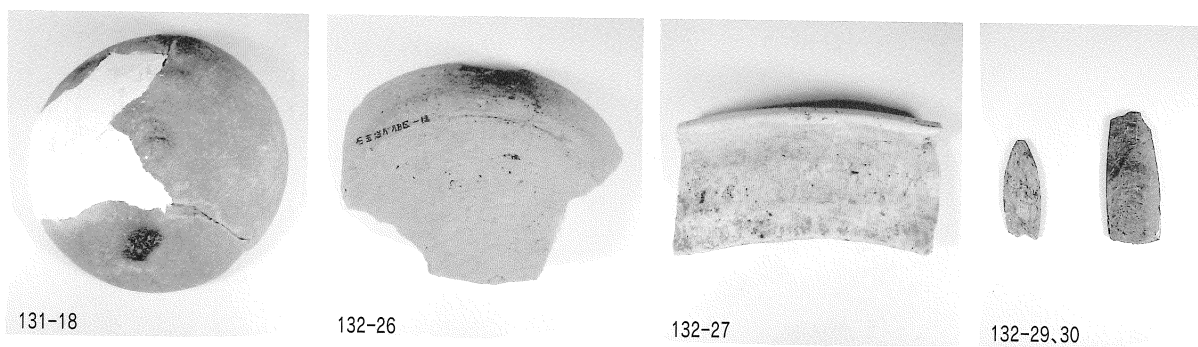
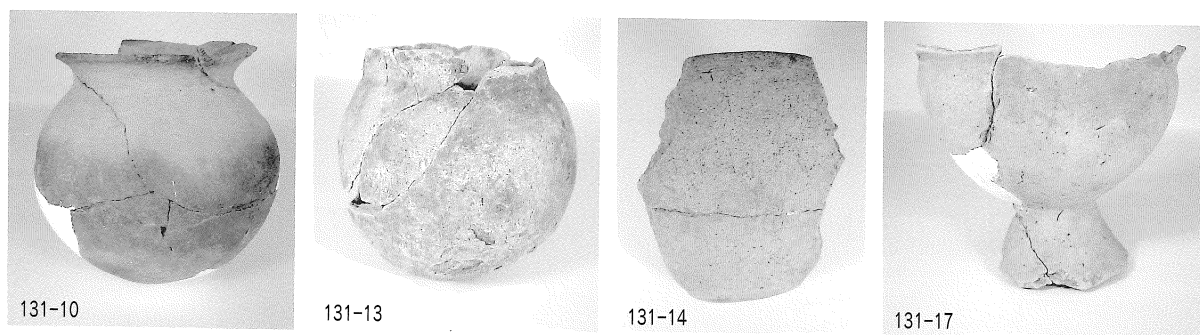
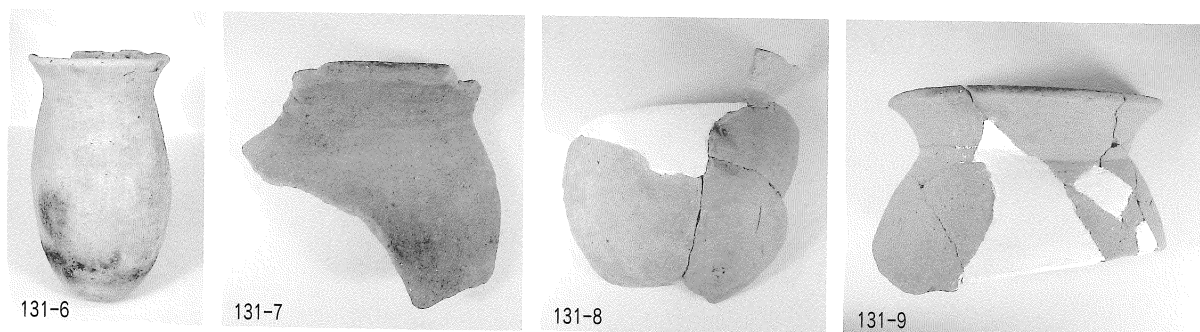
127-31

柱穴（ピット）出土遺物（124・126・127図参照）



石五道原地区出土遺物 (第127・128・129・130・131図参照)

写真图版20 (高添遺跡石五道原地区)



石五道原地区出土遺物 (第131・132・133図参照)